

漢字と文化

漢字文化の全き繼承と發展のために

京都大學21世紀 COE 東アジア世界の人文情報學研究教育據點

特 集 號

京都大學人文科學研究所 創立75周年記念

「中國宗教文獻研究 國際シンポジウム」

2004年11月18日～21日 京都大學百周年時計臺記念館

プログラムと發表要旨

Institute for Research in Humanities, Kyoto University
Memorial Symposium for the 75th Anniversary of Its Foundation
“Religions in Chinese Script: Perspectives for Textual Research”

November 18th-21st, 2004, Kyoto University Clock Tower Centennial Hall

Program and Abstracts of Papers

ごあいさつ

京都大學人文科學研究所長 森 時彦

わたくしども京都大學人文科學研究所は、今年2004年に創立75周年を迎えました。数え方はすこし複雑です。現在の京都大學附置研究所としての人文科學研究所は、1949年に三つの研究所が統合して設立されました。三つの研究所とは、1939年に京都帝國大學の附置研究所として設置された人文科學研究所（わたくしどもは舊人文と呼んでいます）、1934年にドイツ文化研究所として設立され、1945年に改組されて成立した西洋文化研究所、そして1929年に設立された東方文化學院京都研究所が1934年に改組して成立した東方文化研究所です。このうち最も早い1929年から数えて75年ということになります。

外務省から助成金をうけ、中國文化を中心とした學術研究を目的として設立された東方文化學院京都研究所は、1929年の4月に發足しましたが、正式の開所式は1930年11月、北白川の高臺にスパニッシュ・ロマネスク様式の瀟洒な新所屋が完成した時にあわせて舉行されました。このため、開所を記念する行事は毎年11月に行われるのが慣わしになっています。平年ですと、11月の第一木曜日に開所記念講演會を開き、當研究所の研究者が三人、各人の得意分野における研究成果を披露しておりますが、今年はとくに節目の年にあたりますので、国内外から第一線で活躍しておられる研究者を多數お招きして、11月18日～21日の四日間にわたり、フランス國立極東學院・イタリア國立東方學研究所との共催で、「中國宗教文獻研究國際シンポジウム」を開催することにしました。ご多忙の中、シンポジウムへの参加を快諾いただいた發表者の皆様には心より御禮申し上げます。

佛教や道教など中國宗教の研究は、東方文化學院京都研究所の發足以來、一貫して研究所のもっとも重要な研究分野の一つとして、重厚な成果を蓄積するとともに、東方文化研究所の初代所長をつとめた松本文三郎をはじめ數多の碩學を輩出してきました。そして現在も、世界に誇るべきスタッフが揃っている分野の一つであることはご存知のとおりですが、最近當研究所との連携関係が緊密化しているフランス國立極東學院・イタリア國立東方學研究所も、やはり中國宗教研究に數多くの成果を擧げておられます。このような次第で、中國宗教文獻研究という今回のシンポジウムのテーマは、75年におよぶ研究所の長い歴史に思いを馳せながら、同時に國際的な連携研究の新しい方向を探る第一歩として、まことに相應しい設定ではないかと、ひそかに自負しております。

またこのシンポジウムは、高田時雄教授を據點リーダーとする21世紀 COE プログラム「東アジア世界の人文情報學研究教育據點」の研究プロジェクトの一環として企畫されたものでもあります。中國學の傳統に安住することなく、新しい中國學の可能性を探るという21世紀 COE プログラムの趣旨にも、よく合致したテーマ設定になっております。さらに今年は國立大學法人スタートの年にも当たります。わたくしども人文科學研究所も決意を新たに、人文學分野における研究・教育の發展にいつそう貢獻する所存です。その意味からもこのシンポジウムが、100周年へ向けた新たな四半世紀のはじまりに際して研究所の新しい傳統を築いていく第一歩となるよう期待してやみません。

最後に皆様の温かいご支援と忌憚のないご批判をお願いして、京都大學人文科學研究所創立75周年記念國際シンポジウム開催のごあいさつといたします。

プログラム PROGRAM

11月18日（木）

9:00～12:20

開會挨拶 京都大學總長 尾池和夫

開會の辭 京都大學人文科學研究所長 森時彦

佛教文獻 司會 船山徹

・方廣錫（中國語） ・辛嶋靜志（日本語） ・落合俊典（日本語）

14:00～17:30

佛教文獻 司會 シルヴィオ・ヴィータ（イタリア國立東方學研究所）

・王邦維（中國語） ・榎本文雄（日本語）

・船山徹（日本語） ・A. Forte（日本語）

11月19日（金）

9:00～12:00

佛教文獻 司會 フランソワ・ラショオ（フランス國立極東學院）

・劉淑芬（中國語） ・S. Vita（日本語） ・J.-N. A. Robert（日本語）

14:00～17:30

景教・マニ教・イスラム教文獻 司會 高田時雄

・林悟殊（中國語） ・M. Deeg（日本語）

・榮新江（中國語） ・濱田正美（日本語）

11月20日（土）

9:00～12:00

道教文獻 司會 麥谷邦夫

・J. M. Boltz（英語） ・F. Verellen（英語） ・M. Esposito（日本語）

14:00～17:30

道教文獻 司會 小南一郎 モニカ・エスポジト

・李遠國（中國語） ・王承文（中國語）

・麥谷邦夫（日本語） ・小南一郎（日本語）

11月21日（日）

9:00～12:00

中國宗教文獻情報學 司會 クリスティアン・ウィッテルン

・釋惠敏（中國語） ・師茂樹（日本語） ・Ch. Wittern（日本語）

14:00～15:30

中國宗教文獻情報學 司會 クリスティアン・ウィッテルン

・M. Arnold（英語） ・F. Pregadio（英語）

發表題目と要旨―目次

方廣鋁「漢文大藏經の時期区分と特徴について」	6
辛嶋静志「『佛典漢語詞典』の構想」	8
落合俊典「日本の古寫經と中國佛教文獻―天野山金剛寺藏平安後期寫『優婆塞五戒法』 の成立と流傳を巡って」	10
王邦維「洛州無影―『南海寄歸内法傳』中の一文に関する新考察」	12
榎本文雄「佛教研究における漢譯佛典の有用性」	14
船山徹「經典の偽作と編輯―『遺教三昧經』と『舍利弗問經』」	16
アントニーノ・フォルテ「地婆訶羅に関する漢語史料」	18
劉淑芬「『禪苑清規』にみえる唐・宋寺院の茶禮と湯禮」	20
シルヴィオ・ヴィータ「唐代の石刻資料にみる僧侶と經典―大藏經資料を中心として」	22
ジャン＝ノエル A. ロベール「竺法護譯『正法華經』における翻譯の方法―第三章 「譬喩品」を中心として」	24
林悟殊「漢文マニ教經典と景教經典の巨視的比較」	26
マックス・デアク「瓦礫の山から神を掘る―唐代景教文獻と研究のイデオロギー」	28
榮新江「唐代の佛教と道教からみた外道―景教徒」	30
濱田正美「『歸真總義』―中央アジアにおけるその源流」	32
ジュディス・マギー・ボルツ「淨明道の祖師許遜にまつわる物語の再検討」	34
フランシスクス・ヴェレレン「儀禮の解明―齋に對する陸修靜の影響」	36
モニカ・エスポジト「清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』」	38
李遠國「天書雲篆―道教の符圖文獻とその分析」	40
王承文「靈寶の「天文」信仰と古靈寶經の教義の展開―敦煌本『太上洞玄靈寶眞文 度人本行妙經』を中心として」	42
麥谷邦夫「道教類書と教理體系」	44
小南一郎「寶卷と明清の民間信仰―目連傳承を中心に」	46
釋惠敏「デジタル化した古籍校勘版本の處理技術―CBETA 大正藏電子佛典を 例として」	48
師茂樹「大規模佛教文獻群に對する確率統計的分析の試み」	50
クリスティアン・ウィッテルン「唐代ナリッジベースから見た禪宗」	52
マティアス・アーノルド「雲居寺の碑文―CD-ROM のための準備作業」	54
ファブリツィオ・プレガディオ「道教研究におけるデジタル資源」	56

Abstracts of Papers—Index

方廣錫〈論漢文大藏經的分期與特點〉·····	7
Karashima Seishi, “A Project for a Buddhist Chinese Dictionary”·····	9
Ochiai Toshinori, “Old Japanese Manuscripts and the Literature of Chinese Buddhism: On the Composition of the <i>Youpose wujiefu</i> from the Kongōji and Its Circulation”···	11
王邦維〈“洛州無影”：《南海寄歸內法傳》中一條記載的最新考察〉·····	13
Enomoto Fumio, “Usefulness of Chinese Translations for the Study of Buddhism”·····	15
Funayama Tōru, “Forgery and Compilation of Buddhist Scriptures: The <i>Yijiaosanmei jing</i> and the <i>Shelifu wen jing</i> ”·····	17
Antonino Forte, “Chinese Sources on Divākara”·····	19
劉淑芬〈《禪苑清規》中所見唐·宋寺院中的茶禮和湯禮〉·····	21
Silvio Vita, “Monks and Texts in Stone Inscriptions during the Tang, with Special Reference to the Dazangjing Collection”·····	23
Jean-Noël A. Robert, “Translation Strategies in Dharmarakṣa's Version of the <i>Lotus Sutra</i> , with Special Reference to Chapter 3 (“Parable”)”·····	25
林悟殊〈漢文摩尼教經與景教經之宏觀比較〉·····	27
Max Deeg, “Digging out God from the Rubbish Heap: The Chinese Nestorian Documents and the Ideology of Research”·····	29
榮新江〈唐代佛道二教眼中的外道——景教徒〉·····	31
Hamada Masami, “The <i>Guizhen zongyi</i> and Its Central Asiatic Background”·····	33
Judith Magee Boltz, “Reconsidering the Story of Xu Xun, Patriarch of Jingming dao”·····	35
Franciscus Verellen, “The Illumination of Ritual: Lu Xiujing's Reflections on the Retreat”·····	37
Monica Esposito, “The Secret of the Golden Flower and the Establishment of the Longmen Lineage at Mt. Jin'gai during the Qing Dynasty”·····	39
李遠國〈天書雲篆：道教符圖的文獻及其分析〉·····	41
王承文〈靈寶“天文”信仰與古靈寶經教義的展開——以敦煌本《太上洞玄靈寶真文 度人本行妙經》為中心〉·····	43
Mugitani Kunio, “The Daoist Doctrinal System through the Mirror of <i>Leishu</i> Encyclopedias”·····	45
Kominami Ichirō, “Precious Scrolls and Folk Beliefs during the Ming and Qing Dynasties, with Special Reference to the Mulian Literary Tradition”·····	47
釋惠敏〈數位化古籍校勘版本處理技術——以 CBETA 大正藏電子佛典為例〉·····	49
Moro Shigeki, “The Statistical Analysis of Large-Scale Groups of Buddhist Texts”·····	51
Christian Wittern, “The Chan School as Seen through the Tang Knowledgebase”·····	53
Matthias Arnold, “Historical Inscriptions at Cloud Dwelling Monastery: Preparations for a CD-ROM”·····	55
Fabrizio Pregadio, “Digital Resources in Daoist Studies”·····	57

漢文大藏經の時期区分と特徴について

方廣鋈
(上海師範大學)

一 漢文大藏經の時期区分およびその他

寫本期・版本期・近現代印刷本期・電子本期

第一 漢文大藏經の定義：一定の基準により取舍選擇され、一定の基準による構造をもち、あわせて一定の外部標識をもつ、漢文佛教典籍および關係する文獻の叢書

第二 「漢文大藏經」ということばの適用範圍

第三 漢文大藏經の變化を促成した要素

- (一) 中國佛教による原因 (二) 佛教以外の原因 (三) 編纂人員による原因
(四) 體裁と製作方式による原因 (五) 裝丁形式による原因

二 漢文大藏經の各時期の基本的な特徴

(一) 寫本期

漢文大藏經の寫本期はおよそ六段階に分けることができる

- 1 育成段階 2 形成段階 3 構造が體系化した段階 4 全國で統一化した段階
5 版本と併存していた段階 6 純粹な功德の段階

寫本大藏經の基本的な特徴 — 唯一性

- 第一 行格、界欄および全體の風格の差違 第二 文字の差違
第三 經文の差違 第四 内容と構造の差違

系統と目録

(二) 版本期

版本、版本と版本學

遼大字藏

(三) 印刷本期

第一 排印本

- 1 鉛印 (鉛活字をならべ紙型をつくる) 2 寫眞植字 (フィルム出力)

第二、影印本

- 1 排列をかえていないもの 2 排列をかえてしまったもの

(四) 電子本期

第一 初歩的な段階

- 1 スキャンした本 2 電子テキスト

第二 高度な段階

- 1 一般的なハイパーテキスト 2 雙方向的なハイパーテキスト

方廣鋈 FANG Guangchang ほう・こうしょう

1948年生

上海師範大學哲學系教授 博士 (中國社會科學院研究生院)

主要著作 《佛教大藏經史 (八～十世紀)》《敦煌文獻分類錄校叢刊・敦煌佛教經錄輯校》《英國圖書館藏敦煌遺書目録 (斯6981號～斯8400號)》ほか多数

論漢文大藏經的分期與特點

方廣鋐
(上海師範大學)

一、漢文大藏經的分期及其他

寫本時期、刻本時期、近現代印刷本時期、數碼化時期。

第一、漢文大藏經的定義：按照一定的取舍標準甄別，按照一定的結構規範組織，並具有一定的外在標誌的漢文佛教典籍及相關文獻的叢書。

第二、“漢文大藏經”一詞的適用範圍

第三、促成漢文大藏經演化的因素

(一)、中國佛教的原因

(二)、佛教外的原因

(三)、編纂人員的原因

(四)、載體與製作方式的原因

(五)、裝幀形式的原因

二、不同時期漢文大藏經的基本特點

(一)、寫本時期

漢文大藏經的寫本時期大體可以分為六個階段。

1、醞釀階段 2、形成階段 3、結構體系化階段

4、全國統一化階段 5、與刻本並存階段 6、純功德階段

寫本藏經的基本特點 — 唯一性。

第一、行款、界欄及整體風格的差異

第二、文字差異

第三、經文差異

第四、內容與結構差異

系統與目錄。

(二)、刻本時期

版片、版本與版本學

遼大字藏

(三)、印本時期

第一、排印本

1、鉛印（排鉛字，做紙型） 2、激光照排（出膠片）

第二、影印本

1、沒有改變編排 2、改變了編排

(四)、數碼本時期

第一、初級階段

1、掃描本 2、電子文本

第二、高級階段

1、一般的超文本 2、互動的超文本

『佛典漢語詞典』の構想

辛嶋静志

(創價大學國際佛教學高等研究所、東京)

漢譯佛典を言語面から子細に研究すれば、それは漢語史、とりわけ漢語口語史の重要な資料としてのみならず、漢譯に比べ成立の遅い梵語佛典からだけでは分からない佛典の成立・発展の問題に手掛かりを与える貴重な資料としての面貌を示す。

特に、後漢・魏晉代の漢譯佛典は、梵語寫本（いくつかの例外を除けば、古くて六、七世紀、殆どは十一世紀以降に書寫）よりも遙かに古く、大乘仏教の成立の問題を考える上でも重要な資料と考えられているが、漢語・梵語・チベット語佛典の正確な讀解に基づく本格的な研究は始まったばかりである。

しかし、漢譯佛典に見える特殊なあるいは口語的な語彙・語法が漢語辭典や文法書に引かれるのは稀で、このことが漢譯佛典を正確に讀むことを困難にしている。最近、中國學の方面から漢譯佛典の語彙・語法を研究する機運が高まり、いくつかの優れた研究業績も發表されている。しかし、中國學からの研究は概して、用例を集め意味を歸納的に明らかにするか、外典（佛典以外の文獻）での類似の用法との比較に終始しており、漢譯佛典の特徴が生かされていない。すなわち、漢譯佛典は“翻譯”であり、梵語・パーリ語・チベット語などのテキスト、あるいは異なる翻譯者の手になる“異譯”との比較對照が可能であるという点である。漢譯佛典の難解な語法・語彙も梵語などのテキストあるいは異譯と比較することでその意味がより定かになったり、今まで見えなかったものが見えてくる場合も少なくないのである。

この様な學問的趨勢を鑑みるに、中國學とインド學・佛教學の兩方の成果を踏まえた、一つ一つの初期漢譯佛典ごとの精細な語彙・語法研究さらにそれに基づく譯者別の語彙・語法研究が火急に求められていると考えられる。

筆者はこの方向の研究の手始めとして、すでに『正法華經詞典』（1998）・『妙法蓮華經詞典』（2001）を出版し、目下は、來年度の出版をめざして『道行般若經詞典』・『道行般若經校釋』を執筆している。また中國の漢語史研究者及び歐米の佛教學者と共同で、安世高譯を中心とした『東漢代非大乘經典詞典及校釋』の三、四年内の出版を計畫している。このユニークな共同作業がうまく行けば、同様の方法で、さらに支婁迦讖譯、支謙譯など譯者別の詞典とテキストを出版して行こうと考えている。そして最終的にはこれらをまとめて、漢語佛典を材料にした『佛典漢語詞典』の形にまとめたいと思う。

辛嶋静志 KARASHIMA Seishi

1957年生

創價大學國際佛教學高等研究所教授 文學博士（北京大學）

主要著作 *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra. A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra.* 『『長阿含經』の原語の研究 — 音寫語分析を中心として』 *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapundarikasūtra* 「漢譯佛典の漢語と音寫語の問題」ほか多数

A Project for a Buddhist Chinese Dictionary

Karashima Seishi

(The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University)

Chinese translations of Buddhist scriptures are very important not only for Chinese philology, but also for Buddhist studies. They greatly predate most of our extant Sanskrit and Tibetan manuscripts, and may provide substantial clues to the origin and development of Buddhist scriptures. Particularly, early Chinese translations, ranging from the 2nd to the 4th century of the Common Era, are primary sources for studying the formation of *Mahāyāna* Buddhism.

The proper study of such texts, based on a critical comparison of Chinese, Sanskrit and Tibetan versions, has just begun. However, the extensive usage of neologisms—most of them, Buddhist technical terms—and of vernacular expressions in Chinese Buddhist translations, makes their study difficult. Fortunately, an increasing number of sinologists are taking an interest in this field. Most of their studies on this topic, however, show a tendency to ‘pick’ only the most interesting colloquial words and usages from a large amount of vernacularisms. Apart from this, these scholars devote themselves to piecing together instances of vernacularisms from various Buddhist scriptures or comparing them with similar expressions in Chinese secular literature. This is done in order to define their meaning inductively, without making the best use of the special character of Buddhist scriptures, i.e., without taking into account that they are translations and that in most cases there are corresponding texts in Sanskrit, Pāli or Tibetan as well as alternative translations in Chinese. Vernacularisms and neologisms in Buddhist texts may be clarified through comparison with their equivalents in such materials.

In view of all this it becomes clear that a detailed glossary is greatly needed for each Buddhist scripture which lists and defines medieval vernacular words and usages, semantic peculiarities, Buddhist technical terms, transliterations, etc. On the basis of such glossaries, one could further imagine larger compilations that would cover all translations done by a particular translator (or team of translators).

My first attempts in this direction were *A Glossary of Dharmarakṣa’s Translation of the Lotus Sutra* (1998) and *A Glossary of Kumārajīva’s Translation of the Lotus Sutra* (2001). At present, I am in the process of writing *A Glossary of Lokakṣema’s Translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* and *Lokakṣema’s Translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā: Annotated Text*, both of which are to be published in the coming academic year. Apart from these, I am planning to compile *A Philological Study and Glossary of Non-Mahāyāna Translations from the Eastern Han*, which will mainly deal with translations by An Shigao 安世高. This project will involve collaboration with Chinese specialists of the history of the Chinese language and western Buddhist scholars, and should be completed in three or four years. If this unique collaboration works out well we shall compile additional annotated texts and glossaries of Chinese translations by Lokakṣema 支婁迦讖, Zhiqian 支謙 and so on in a similar way with the aim of completing a Chinese Buddhist Dictionary.

日本の古寫經と中國佛教文獻 — 天野山金剛寺藏平安 後期寫『優婆塞五戒法』の成立と流傳を巡って

落合俊典

(國際佛教學大學院大學、東京)

大阪府河内長野市にある天野山金剛寺は行基（668－749）創建の傳承を有する古刹であるが、歴史的文献によってその事實を徴することは難しく、ようやく11世紀になってはじめて傍證が得られる。一般的に古代中世の由緒ある大寺院に共通して存在していた一切經は、その後の戦亂・火災等で消失したものが多く、幸いにも金剛寺は四千數百卷の經卷を現在まで傳えている。この一切經は同時代に書寫されたものではなく、過半は鎌倉中期の書寫であるが、古いものは平安中期の11世紀の寫經があるように時間をかけて形成された一切經である。

さて、金剛寺一切經中に貴重な寫本 — 後漢の安世高譯とされ、隋代には散逸したとされた『十二門經』 — が梶浦晉氏によって發見されて以來本格的な調査が開始され（2000年）、今日まで繼續している。本稿ではその後發見された經典のなかの一點、『優婆塞五戒法』について報告するものである。

平成15年（2003）の夏の調査の結果、劉宋求那跋摩譯『優婆塞五戒威儀經』（大正藏 No. 1503）と想定して書寫した金剛寺本『優婆塞五戒法』は、大正藏本と内容を異にした寫本であることが判明した。本書は奈良時代の737年までに日本に將來されたものの轉寫本であろう。

この、長らく失われていたと思われていた金剛寺本『優婆塞五戒法』は、羅什と弗若多羅の共譯である『十誦律』に基づいて在家から沙彌に至る者が遵う受戒規定の作法書であった。成立時期は五世紀中葉頃と考えられる。

落合俊典 OCHIAI Toshinori

1948年生

國際佛教學大學院大學教授

主要著作 『七寺古逸經典研究叢書』 全六卷（牧田諦亮監・落合俊典編）「大唐西域求法高僧傳の研究」「二種の『馬鳴菩薩傳』 — その成立と流傳」「初期譯經と毘羅三昧經」〈羽田亨稿《敦煌祕笈目錄》簡見〉ほか多数

Old Japanese Manuscripts and the Literature of Chinese Buddhism: On the Composition of the *Youpose wujiefa* from the Kongōji and Its Circulation

Ochiai Toshinori

(International College for Postgraduate Buddhist Studies, Tokyo)

Located in the district of Kawachinagano 河内長野 City (Osaka Prefecture), Amanosan Kongōji 天野山金剛寺 is a temple whose foundation was traditionally attributed to Gyōki 行基 (668 – 749). Such antiquity, however, has not been historically proved as the first actual reference to its existence can only be traced to the 11th century.

During the early medieval period, it was common practice for large temples in Japan to hold collections of the whole Buddhist canon; but most of these have been lost through war and fire. Fortunately, between four and five thousand scrolls from the temple canon have survived at the Kongōji. The texts were not all copied at the same time: half of them are from the middle of the Kamakura period (13th century) and the oldest ones date back to the middle of the Heian period (11th century). Apparently, then, it took about two centuries for the Kongōji to complete its own canonical collection.

The first discovery of a very important sutra preserved at the Kongōji was made by Kajiura Susumu 梶浦 晋. This is a translation from the later Han period (2nd century) by An Shigao 安世高 which was believed to have been lost during the Sui period. As a consequence of this discovery, a group of scholars started in 2000 an in-depth research of the whole collection which is still ongoing and has already yielded other long hidden texts. My presentation deals with one of these.

The survey carried out at the Kongōji during the summer of 2003 brought to light a text called *Youpose wujiefa* 優婆塞五戒法. The scribe appears to have copied it by mistake. Most likely he was supposed to copy a text bearing a similar title but of different contents, the *Youpose wujie weiyi jing* 優婆塞五戒威儀經 (T24, no.1503) translated by Guṇavarman. The text discovered at the Kongōji was brought to Japan by 737, and was thereafter ignored. Probably written in the middle of the 5th century, it consists of a manual explaining how novices should obtain the Buddhist precepts based on Kumārajīva and Puṇyātara's translation of the *Shisonglü* 十誦律 (T23, no.1435).

洛州無影 — 『南海寄歸內法傳』中の一文に関する新考察

王邦維
(北京大學)

唐の義淨『南海寄歸內法傳』卷三には「旋右觀時」という章があり、當時インドや南海地域では一日の中でいかに時刻を測定していたか、また中國・インドおよび南海においてそれぞれに異なる様々な情況についての記述があり、その中の一段では次のように述べている。

瞻部洲中、影多不定、隨其方處、量有參差。即如洛州無影、與餘不同。

(瞻部洲では影の長さはさまざまであり、場所によって長さに差異がある。即ち洛州などでは影ができず、ほかの場所とは異なっている。)

洛州は今日の河南省洛陽である。洛陽の地理的位置は北回歸線より北にあり、天文學的見地からいうと、一年中いかなる時も「無影」という状態が起こる可能性はない。日本の高楠順次郎博士が百年前イギリスのオックスフォードから出版した『南海寄歸內法傳』英譯本の中では、この問題に對して一つの解釋がなされているが、あまり説得力がない。十七年前、筆者が『南海寄歸內法傳』を研究していた際、これは義淨の誤解であると考えた。しかし十一年前ある偶然の機會により、古代洛州のある場所では、陰曆の夏至に「無影」という特殊な現象が起こり得たこと、よって義淨のいう「洛州無影」は、實は根據のないことではなかったことに気づいた。そのため筆者は四年前に『『洛州無影』について』と題する論文を執筆したが、これに對しては意見を異にする人もいる。本稿では、今年6月21日、つまり陰曆の夏至の日に河南省登封市告成鎮でおこなった「無影」に関する實地調査の結果に基づき、文獻と併せて「洛州無影」や関連する多くの問題について更なる検討を加え、それによって義淨の記述に對してより深く掘り下げた考察をおこなう。これが正しいか否かは、専門の方々よりご教示賜りたい。

本稿には、「無影」の實地調査の際に撮影した寫眞數點を添付する。

王邦維 WANG Bangwei おう・ほうい

1950年生

北京大學東方學研究院教授 文學博士(北京大學)

主要著作 《南海寄歸內法傳校注》《大唐西域求法高僧傳校注》
〈玄奘梵音“四十七言”和義淨的“四十九字”〉〈鳩摩羅什《通韻》考疑暨敦煌寫卷 S.1344 號相關問題〉“Buddhist Nikāyas through Ancient Chinese Eyes”ほか多數

“洛州無影”：《南海寄歸內法傳》中一條記載的最新考察

王邦維
(北京大學)

唐義淨《南海寄歸內法傳》卷三有“旋右觀時”一節，講當時在印度以及南海地區一日之中怎樣測定時辰，以及中國、印度和南海方面的種種不同情形，其中一段講：

“瞻部洲中，影多不定，隨其方處，量有參差。即如洛州無影，與餘不同。”

洛州即今天河南的洛陽。洛陽的地理位置，在北回歸線以北，從天文學的角度講，一年之中任何時候都不可能出現“無影”的情形。日本的高楠順次郎博士一百年前在英國牛津出版的《南海寄歸內法傳》英譯本中，對此做過一種解釋，但難以使人信服。十七年前，筆者在研究《南海寄歸內法傳》時，認為這是義淨書中的錯誤。但十一年前一次偶然的機會使筆者發現，在古代洛州，確實有一處地方，在農曆夏至之時，可以出現“無影”的奇觀，因此義淨講的“洛州無影”，其實不是沒有根據。為此筆者四年前寫過一篇題為《關於“洛州無影”》的文章，發表之後，卻又有朋友提出不同意見。本文根據今年6月21日，即農曆夏至之日，在河南登封市告成鎮實地觀察“無影”的結果，結合文獻，對“洛州無影”以及相關的諸多問題做進一步的討論，以對義淨書中的記載進行更深入的考察。是否正確，尚希得到專家們的指教。

文章附實地考察“無影”時拍攝的照片數張。

佛教研究における漢譯佛典の有用性

榎本文雄
(大阪大學)

佛教を研究するに際し、中國佛教を始めとした東アジア佛教の分野では、漢文佛典は一次資料となる。では、インド語文献が一次資料となるインド佛教の研究に際して、漢譯佛典は如何なる有用性を有するのか。この點に關して考えられるものを列擧すると、以下のようになる。

1. インド語原典もチベット譯なども現存しないテキストの場合、漢譯佛典は現存する唯一の version として不可欠な資料である。
2. インド語原典が現存するテキストでも、それと異なる version を提示する場合、現存するインド語テキストよりも古い version であることが多く、漢譯佛典は貴重である。
3. インド語原典が現存し、それと同じ version の場合でも、漢譯佛典はインド語原典の内容理解に資したり、インド語原典の校訂に有用である。
4. 漢譯佛典の譯出に關する記録から、そのテキストのインドにおける成立年代の下限などの重要な情報が得られる。

本發表では、これらの諸點が孕む問題點や新たな研究の可能性について、原文を挙げつつ検討してみたい。

榎本文雄 ENOMOTO Fumio

1954年生

大阪大學大學院文學研究科教授 文學博士（京都大學）

主要著作 “‘Mūlasarvāstivāda’ and ‘Sarvāstivāda’” “Sanskrit Fragments from the *Saṃgītanipāta of the *Samyuktāgama*” *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen III* (co-author) 「初期佛教思想の生成—北傳阿含の成立」 「初期佛典における āsrava (漏)」 ほか多数。

Usefulness of Chinese Translations for the Study of Buddhism

Enomoto Fumio
(Osaka University)

In the academic study of Buddhism, Chinese texts constitute the primary source-material for East Asian Buddhism. However, regarding Indian Buddhism, how useful are Chinese translations, considering that texts in Indo-Aryan languages form the primary material? We can postulate the following cases:

1. When the Indian original or its translation in Tibetan or other languages is lost, the Chinese translation is indispensable as the only surviving version.
2. When the Indian original is extant but the Chinese translation is based on a different (and often earlier) version, discrepancies in the texts can occasionally provide valuable information.
3. When the Indian original is extant and the Chinese translation corresponds to the same version, the translation is helpful in editing and understanding the original.
4. Records about the Chinese translation give us important information such as the latest possible date for the formation of the Indian text.

I will discuss problems concerning these aspects and the possibility of further study, with concrete examples of texts.

經典の偽作と編輯 — 『遺教三昧經』と『舍利弗問經』

船山徹
(京都大學)

最初に、漢語で記された佛教經典（スートラ）を三種に分類する假説を示す。

1. 翻譯經典（漢譯）：インド語の原典から翻譯された經典
2. 疑經（中國撰述經典）：インドにはない中國固有の要素を含む、中國で作成された經典
3. 編輯經典：インド起源の諸構成要素を用いて中國で編輯された經典

このうち2の疑經と3の編輯經典の共通點と相違點を具體的に考察するために、『遺教三昧經』と『舍利弗問經』を取り上げる。前者は疑經であり、全文は残念ながら現存しないが佚文は回収可能である。一方、後者は、インドの摩訶僧祇部（大衆部）の説を伝える純然たる翻譯經典であると従来考えられてきた。

本發表では、『遺教三昧經』が疑經であること、『舍利弗問經』は純粹な翻譯ではなく、恐らくは法顯の歸國直後の頃に、中國で何らかの編輯が加えられて成立した經典であること、ただし後者は一部に中國固有の構成要素を有する點において、インド佛教の資料として使用する際は若干注意が必要なことを指摘する。

兩經典によれば、インドには五部派が存在し、それぞれが僧衣の色を異にしたという（五部僧衣別色説）。インドの部派を五部派とすることにも問題はあるが、とりわけ奇妙なのは部派ごとに衣の色が異なっていたとされる點である。これをインドで成立した説と解釋するのは困難であり、中國で成立した説と解釋すると色々な點がうまく説明できる。一方、同説が『舍利弗問經』にも確認されることは、同經の少なくともこの部分は中國佛教固有の要素であることを示唆する。

船山徹 FUNAYAMA Tōru

1961年生

京都大學人文科學研究所助教授

主要著作 「漢譯」と「中國撰述」の間 — 漢文佛典に特有な形態をめぐって」「捨身の思想 — 六朝佛教史の一斷面」「六朝時代における菩薩戒の受容過程 — 劉宋・南齊期を中心に」「Kamalaśīla's Interpretation of 'Non-erroneous' in the Definition of Direct Perception and Related Problems」「On the Date of Vinītadeva」ほか多数

Forgery and Compilation of Buddhist Scriptures: The *Yijiao sanmei jing* and the *Shelifu wen jing*

Funayama Tōru
(Kyoto University)

As a working hypothesis, Chinese Buddhist scriptures (sutras) can be classified into the following categories:

1. Translated Scriptures, i.e. scriptures translated into Chinese from original Indic texts;
2. Apocrypha, namely scriptures composed in China and containing elements peculiar to Chinese Buddhism;
3. Compiled Scriptures, i.e. scriptures compiled in China by making exclusive use of Indian elements.

In order to explore in concrete terms the similarities and differences between category 2 and 3 above, I shall examine the *Yijiao sanmei jing* 遺教三昧經 and the *Shelifu wen jing* 舍利弗問經. The former is an apocryphon, now extant only in fragments collected from later citations. The latter, however, has been regarded by scholars as a genuine translation of an Indian Mahāsāṅghika text.

In my paper, I will suggest that the *Yijiao sanmei jing* is an apocryphon, and that the *Shelifu wen jing* is not a genuine translation but a scripture which was compiled in China, probably soon after Faxian's 法顯 return from India, and that it contains some elements peculiar to Chinese Buddhism. This in turn forces us to exercise caution on its status as a source about Indian Buddhism.

According to both scriptures, during the Śrāvakayāna age in India there were five Buddhist groups or *nikāyas* and the monks of each group wore robes of different colors. Numbering the *nikāyas* as five, however, is problematic, and even more peculiar is the assertion that *nikāyas* wore robes different in color. This notion, which is also found in the *Shelifu wen jing*, is difficult to accept as Indian in origin but easily explained if we consider the *Yijiao sanmei jing* as a Chinese apocryphon. Hence we can suggest that the part of the *Shelifu wen jing* dealing with the robes' color reflects a Chinese indigenous character.

地婆訶羅に関する漢語史料

アントニーノ・フォルテ
(ナポリ東洋大學)

佛典の輸入翻譯者として著名な地婆訶羅（ディヴァーカラ）は、年代論的には玄奘（664年没）よりも後に位置し、そして、七世紀末から八世紀初の翻譯者であるインドの菩提流志（727年没）や、コータンの實叉難陀（652–710）、義淨（635–713）などよりも前に位置する人物である。

本稿では、(a)地婆訶羅の傳に関する今日入手しうる諸史料の概説、(b)これら諸史料が我々に與えてくれる傳記情報の要約、(c)よく知られている『佛頂尊勝陀羅尼經』の二・三の異譯を地婆訶羅に歸せしめることから派生するいくつかの問題と、同經のいわゆる佛陀波利譯に對する地婆訶羅の參與問題を提示する。

地婆訶羅の傳を示す證據として我々が信頼をおき得る文獻資料のいくつかは、少なくとも一つの碑銘に基づいている。残念ながら688年に龍門における地婆訶羅の墓用に刻されたはずの本來の墓誌銘がどんなものであったかを示す形跡はなにもなく、いかなる史料にも言及されていないのであるが、しかし、690年から705年の間に刻された碑文の形跡はある。その文章を書いたのは武三思かと思われる。彼は、則天武后の甥であり、龍門で地婆訶羅の亡骸を納めた八角塔の近くに香山寺の僧院の建設を推進した人物であった。地婆訶羅に関する現存傳記情報を可能な限り正確に再構築するために、本稿では上述諸史料とその相對的價值について論ずる。

Antonino FORTE アントニーノ・フォルテ

1940年生

ナポリ東洋大學文學部教授

主要著作 *Political Propaganda and Ideology in China at the End of the Seventh Century* *The Hostage An Shigao and His Offspring* *A Jewel in Indra's Net* “The Five Kings of India and the King of Kucha Who According to the Chinese Sources Went to Luoyang in 692” ほか多数

Chinese Sources on Divākara (613 – 688)

Antonino Forte

(Università degli Studi di Napoli “L’Orientale”, Italy)

In terms of chronology, Divākara 地婆訶羅, outstanding importer and translator of Buddhist texts, comes after Xuanzang 玄奘 (d. 664) and before a remarkable group of late 7th and early 8th century translators such as the Indian Bodhiruci 菩提流志 (d. 727), the Khotanese Śikṣānanda 實叉難陀 (652 – 710), and Yijing 義淨 (635 – 713).

In this paper I will present: (a) a general discussion of the available sources on Divākara’s biography; (b) a summary of the biographical information found in these sources; and (c) some problems resulting from the attribution to Divākara of two or three versions of the very popular religious text called *Dhārāṇīsūtra of the High Victory of the Buddha’s Sinciput* (*Foding zunsheng tuoluoni jing* 佛頂尊勝陀羅尼經, Skt. *Buddhoṣṇīṣa vijaya dhāraṇīsūtra*) and of his involvement in the so-called Buddhapālita version.

Some of the literary material on which we rely as evidence for Divākara’s biography is based on at least one epigraphical source. Unfortunately, there is no trace of the original funerary inscription that must have been engraved for Divākara’s tomb at Longmen in 688, and further, this is not mentioned in any of our sources. There is trace, however, of an inscription carved between 690 and 705. Its text might have been written by Wu Sansi 武三思, nephew of Empress Wu and promoter of the construction of the Xiangshansi 香山寺 monastery around the octagonal pagoda containing the remains of Divākara at Longmen. These sources and their comparative value will be discussed in order to reconstruct as correctly as possible the existing biographical information on Divākara.

『禪苑清規』にみえる唐・宋寺院の茶禮と湯禮

劉淑芬

(中央研究院、台灣)

本稿でおもに議論するのは『禪苑清規』中の茶禮と湯禮、およびこれらの儀禮と唐・宋社會生活との関連である。禪寺での禮儀作法で最も盛大な茶禮と湯禮は、冬・夏の兩節（結夏・解夏・當時・新年）になされる茶・湯會、および寺につとめる人々を任免するさいにおこなわれる「執事茶・湯會」である。本文は『禪苑清規』を主な資料とし、その他の関連する文獻とあわせて、『禪苑清規』の茶禮と湯禮を検討する。いつ茶を喫するか、いつ湯を喫するのか、また前後の儀禮の参加者、茶・湯會の準備作業、座席の配置、主賓の儀禮・對話、焼香の儀式などに關しては、いずれも明確で詳細な規定がある。

本稿でもうひとつ重點をおいて検討するのは茶・湯禮と唐・宋社會生活との関連である。寺院生活も社會生活の一部分であり、寺院中での茶禮と湯禮を研究するうえで、世俗社會において関連する儀禮をおごなりにすることはできない。事實、『禪苑清規』中の茶禮と湯禮を、世俗社會における禮儀作法と比較したならば、程度の問題はあるが、たとえば僧堂・茶榜・湯榜・座席の配置・揖禮などは、禪宗の清規が當時の役所での禮儀作法——特に朝堂から各州縣の役所にいたるまでの「食堂」のなかで役人が「會食」する儀禮、をもとにしていることがわかる。ここに、宋代の儒者が寺院での茶湯禮を見て、しばしば「三代の禮學すべてここにあり」と慨嘆した所以がある。

全體としていえば寺院での茶禮と湯禮が世俗社會で客をもてなす茶・湯禮の影響をある程度受けているとはいえ、焼香や說法などの宗教儀式を加え、また僧堂の中が「聖僧の龕」を中心とする儀式空間であることから、禪宗特有の茶湯禮が發展した。それは以下の三種の内容を含む。

儀禮	招待状をつくる「茶榜」と「湯榜」、座席の配置、敬禮
宗教行事	焼香、僧侶の說法
儀式空間	聖僧の龕を中心とする

したがって、唐・宋時期の禪寺での茶禮と湯禮は佛教と世俗社會の間の一種微妙な相互關係を反映していたとすることができる。

劉淑芬 LIU Shufen リゅう・しゅくふん

中央研究院歷史語言研究所研究員 歷史學博士（國立台灣大學）

主要著作 《六朝的城市與社會》〈五至六世紀華北鄉村的佛教信仰〉〈唐代俗人的塔葬〉〈佛頂尊勝陀羅尼經和唐代尊勝經幢的建立——經幢研究之一〉ほか多数

《禪苑清規》中所見唐、宋寺院中的茶禮和湯禮

劉淑芬

（中央研究院、台灣）

本文主要討論《禪苑清規》中的茶禮和湯禮，以及這些禮儀與唐、宋社會生活的關聯。禪寺中禮數最爲隆重的茶禮和湯禮爲冬、夏兩節（結夏、解夏，冬至、新年）的茶、湯會，以及任免寺務人員的「執事茶、湯會」。本文以《禪苑清規》爲主要資料，配合其他相關文獻，探討清規中的茶禮和湯禮，對於在什麼時間喫茶、什麼時間喫湯，以及其前後的禮請參加者，茶、湯會的準備工作、座位的安排、主客的禮儀、對話，燒香的儀式等，都有清楚細密的規定。

本文的另外一個重點在於探討寺院中茶、湯禮與唐、宋社會生活的關聯。寺院生活也是社會生活的一部分，因此，在研究寺院中的茶禮和湯禮時，不可忽略世俗社會中的相關禮儀。事實上，如果我們把《禪苑清規》中的茶禮和湯禮，和世俗社會中的禮節做一比對，可知在某種程度上，禪宗清規取材自當時官方的禮節中——特別是從朝堂到各州縣衙「食堂」中官員「會食」的禮儀，如僧堂、茶榜、湯榜、座位的安排、揖禮等。這就是爲什麼宋儒看到了寺院的茶湯禮，一再慨嘆「三代禮樂，盡在於斯」的緣故。

就整體而言，雖然寺院中的茶禮和湯禮在某種程度上受世俗社會中待客的茶、湯禮的影響，但是它配合了燒香、說法的宗教儀式，以及僧堂之中以「聖僧龕」爲中心的儀式空間，因而發展出禪宗特有的茶湯禮，包括以下三種內容：

禮儀（作爲請帖的「茶榜」、和「湯榜」、座位的安排、行禮）

宗教行事——燒香、僧人說法

儀式空間：以聖僧龕爲中心

因此，唐、宋時期禪寺的茶禮和湯禮實可以反映佛教與世俗社會之間一種微妙的互動關係。

唐代の石刻資料にみる僧侶と經典 — 大藏經資料を中心として

シルヴィオ・ヴィータ
(イタリア國立東方學研究所)

近年、『大藏經』の歴史研究が次々と目覚ましい發展を見せている。中國や日本の研究者がその膨大なコレクションの初期段階を究明し、いわゆる寫本期の様々な側面が明らかになった。大藏經そのものの構成と成立だけでなく、それにかかわる社會風習、制度的背景などが、中國中世の佛教文化の一齣としてより明確な形で認識されるようになった。

そういった一連の研究の中では様々な資料が使われてきたが、碑文などの石刻資料もそれなりの割り合いをしめている。とはいえ、大藏經研究との関連で石刻資料の體系的な収集と判讀がおこなわれてきたとはいいがたいであろう。そのような資料から補足情報を得る目的で、本発表ではいくつかのテキストを紹介しながら唐代の大藏經に、いろいろな形でスポットをあててみたい。それによって、この時代の僧侶が、どのように經典、とくに大藏經の流傳に関わってきたかを考える。

Silvio VITA シルヴィオ・ヴィータ

1954年生

イタリア國立東方學研究所長

主 要 著 作 “Interpretations of Mahayana Buddhism in Meiji Japan: From Religious Polemics to Scholarly Debate” “Li Hua and Buddhism” *Buddhist Asia 1: Papers from the First Conference of Buddhist Studies Held in Naples in May 2001* (co-editor) “Printings of the Buddhist ‘Canon’ in Modern Japan” *The Manuscripts of Nanatsudera, a Recently Discovered Treasure-House in Downtown Nagoya*, by Ochiai Toshinori, translated and edited by Silvio Vita ほか多数

Monks and Texts in Stone Inscriptions during the Tang, with Special Reference to the Dazangjing Collection

Silvio Vita

(Italian School of East Asian Studies)

Much work has been done in recent years on the “canonical” set of Buddhist scriptures in China, the so-called Dazangjing 大藏經. Thanks to researches by Chinese and Japanese scholars we now know much more about its early history, when the collection was transmitted in manuscript form. In fact, different kinds of written documents help us to understand the ways in which the Dazangjing was copied, edited, catalogued, and kept in monastic libraries all over China. From these we have obtained a clearer picture not only of its formation, but also of the role it played as a cultural element in medieval China, in terms of social practices and institutional environment.

In my paper I will concentrate on the epigraphical sources. These have already been used to some extent, but never systematically. I will then pay special attention to inscriptions—some recently found, others included in classical collectanea of prose works—to provide supplementary sources for this field of research. The items will shed more light on how monks were involved in activities related to specific texts or to the whole canonical collection.

竺法護譯『正法華經』における翻譯の方法 — 第三章「譬喩品」を中心として

ジャン＝ノエル A. ロベール
(フランス国立高等研究院)

辛嶋静志氏の、特に『正法華經詞典』(1998年)として結實した竺法護譯に関する先驅的研究のおかげで、『正法華經』の内的一貫性と様式を主眼とする研究が非常に容易になった。

この早期の譯は、五世紀初頭の鳩摩羅什譯に取って代わられた時以降、ずっと悪名を被ってきた。とりわけ竺法護譯に不明瞭な點やほとんど理解不能な點があることは、『法華經』を中心とする諸宗派の内で何度も取りざたされてきたのであり、それ故、鳩摩羅什がいかに多く、そして明瞭に竺法護の語彙を借用しているかはごく表面的に比較しただけでもはっきり判るにもかかわらず、竺法護譯が注釋史の傳統にほとんど何の影響の跡も残していないのは確かに故なきことではない。

私は最近、漢語で書かれたテキストであるという觀點から読みやすさに十分留意しながら、第三章「譬喩品」— これはもちろん廣く認知された章名であって、竺法護譯では「應時〔時宜にかなった〕品」という— を體系的にフランス語譯することを行なった。そこから得られる當面の結論をいくつか示したい。

サンスクリット語原典の寫本や口頭傳承がどうであったかという單純な問題をとび越えて、竺法護が最終的に作り上げた譯本というのは、原語に関するかなり直觀的な知識と、通讀可能な漢語文獻にしようとする配慮と、原典に関する先天的で、たぶん口承的な知識に隨順する必要性— それは法護の直接的でしばしば間違った原典理解と對立するものであった— との間の緊張關係の産物であるように思われる。翻譯としてあまり信用できないことはさておき、驚くべきことにしばしば竺法護譯は興味深い読みを示すことがあり、それ故、全譯を試みる價值があるのである。

テキストの具體例に即してこれらの諸點を検證したいと思う。

Jean-Noël A. ROBERT ジャン＝ノエル A. ロベール

1949年生

フランス国立高等研究院 (EPHE: École Pratique des Hautes Études) 教授 文學博士 (パリ第七大學)

主要著作 *Les doctrines de l'école japonaise Tendai au début du IX^e siècle: Gishin et le Hokke-shû gi shû* 『心の「寺」を觀る— フランス人學者が語る佛教の魅力』 *Le Sutra du Lotus* ほか多數

Translation Strategies in Dharmarakṣa's Version of the *Lotus Sutra*, with Special Reference to Chapter 3 ("Parable")

Jean-Noël A. Robert
(École Pratique des Hautes Études)

Thanks to Professor Karashima's 辛嶋靜志 groundbreaking research in Dharmarakṣa's 竺法護 translation of the *Lotus Sutra*, especially his *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* (1998), it has become much easier to study this text focusing on its inner coherency and style.

This early translation has had a bad reputation ever since it was superseded by Kumārajīva's 鳩摩羅什 masterpiece in the early 5th century. In particular, within the religious circles centred on the *Lotus Sutra*, Dharmarakṣa's version has been repeatedly charged with being obscure and almost unintelligible. It is indeed significant that it left very few traces in the exegetical tradition, although even a very superficial comparison shows how abundantly, and discerningly, Kumārajīva borrowed from Dharmarakṣa's vocabulary.

Lately, I have endeavoured to make a systematic French translation of chapter 3 ("Parable"; this, of course, being the received title, while Dharmarakṣa's rendering could be more accurately translated as "Convenience"), concentrating precisely on the readability of the text from the point of view of the Chinese language. I will present here some of my provisional conclusions.

It seems that, apart from problems of manuscript or oral transmission of the Sanskrit text, Dharmarakṣa's final redaction resulted from a tension between a rather intuitive knowledge of the original language, a concern for a continuously readable Chinese text, and the need to follow his *a priori*, perhaps oral, knowledge of the content of the original against his immediate, and often erroneous, understanding of it. More often than not, a surprising outcome is that Dharmarakṣa's version, apart from its unreliability as a translation, can make for interesting reading and would deserve a fuller translation.

I will try to assess these points with concrete examples taken from the text.

漢文マニ教經典と景教經典の巨視的比較

林悟殊
(中山大學、廣州)

本稿は巨視的な角度から、20世紀に公開された漢文マニ教經典と景教經典の概況について、寫本の收藏と公刊およびその眞偽の鑑別、經文の翻譯・傳播およびその消滅・歸結を重視しつつ、先學の研究の基礎の上に、筆者個人の考察を結合し、要點を選んで紹介し、同時に兩者を相互に比較する。本論では、現存の四つのマニ教寫本は眞に信賴でき、眞偽を辨別する問題はないと考える。しかし景教の寫經は眞本以外に、なお明らかに偽物が入り亂れ、さらに二卷の考察を要する疑わしい經典がある。本稿では、兩教の寫經の眞偽を生みだした社會的、歴史的背景について考察する。このほか、本稿ではさらに現有の文獻資料に基づき、兩教の當時の中國における經典翻譯の規模と、それらの經典の宗教迫害後の運命について相應の検討を加える。

林悟殊 LIN Wushu りん・ごしゅ

1943年生

中山大學歴史系教授 博士生導師

主要著作 《古代日耳曼人》《古代摩尼教》《摩尼教及其東傳》

《波斯拜火教與古代中國》《唐代景教再研究》ほか多数

漢文摩尼教經與景教經之宏觀比較

林悟殊

(中山大學、廣州)

本文從宏觀角度，就二十世紀面世的漢文摩尼教經典和景教經典的大體狀況，著重寫本的收藏刊佈及其真偽鑒別，經文的譯撰流傳及其消亡歸宿等，在前賢研究的基礎上，結合作者個人的考察，擇要介紹，同時將兩者互為比較。文章認為現存的四個摩尼教寫卷真實可靠，不存在辯偽的問題；而景教寫經除真本外，尚明顯混雜贗品，還有兩卷疑經有待考實。文中就兩教寫經真偽產生的社會歷史背景作了考察。此外，文章尚根據現有的文獻資料，對兩教當年在華譯撰經典的規模，以及該等經典在宗教迫害後的命運作了相應的探討。

瓦礫の山から神を掘る — 唐代景教文獻と研究のイデオロギー

マックス・デーク

(ウィーン大學、オーストリア)

人文學および文化研究は近年大きく變化している。研究者たちは（實證主義者の）客觀主義等の概念がいかに脆くはかないものかを益々強く意識するようになる一方で、個人的背景や自らの屬する學問的傳統およびその歴史にいかに関与しているかを益々強く自覺するようになっていく。このような状況は研究の方法論のみならず、研究分野やテーマにも影響を及ぼす。その結論として我々は、自身の研究者としての立場を認識し、そしてこの状況から發生する缺點を必要に応じて是正するために、我々の研究が過去に被り、そして現在も被り續けている諸前提條件を調べなくてはならない。

本稿では、いわゆる唐代の景教文獻について、それらのイデオロギー的・文化的な前提のいくつかを派生する諸問題とともに追跡したい。唐代景教文獻は、幾つかの點で上述の作業をするための理想的な資料根據となりうる。そこには二つの文化的流れと學問領域が關與する。二つとは、最も廣い意味での神學者と、最もニュートラルな意味でのオリエンタリストとである。絶えず景教文獻を使用している、いわゆる布教學を研究する人々と、たとえば景教文獻の眞偽問題および、ある程度その中身までも議論してきた中國學の専門家との間には、かなり大きな溝がある。兩者の接點となるのは、日本人研究者でありキリスト教牧師であった（ピーター）佐伯好郎が行った景教文獻の英譯である。

本稿では、西安の大秦景教流行中國碑といわゆる敦煌景教寫本から幾つかの例をとりながら、いかなる形で、何故に、またどのような結果を招くものとして、同じ一つの文獻の「使用者」である二つのグループの間にコミュニケーションが成立していないかを示したい。特に注目するのは、神學者たち（ゲルハルト・ローゼンクランツ、ピーター・チュウ、サムエル・モッフエット、マーティン・パーマー）らを主とする専門外の者たちばかりでなく、宗教學の専門家や中國學者（ハンス＝ヨアヒム・クリムカイト、タン・リー〔唐麗〕）らであるが、これらの人々は、佐伯好郎の英譯の確固たる傳統のもとに、道教、佛教ないし儒教の衣をかぶったキリスト教の概念の中國的解釋にすぎない諸文獻のうちに、キリスト教の理念と術語とを読み込もうとした。その意味で、彼らは「瓦礫の山から神を掘」ろうとした人々である。さらに私は、上述のような方法で文獻を読むことに内在するイデオロギーの問題を論證したい。このことは、オリエンタリズムとは何かを議論する、より廣い文脈と關係する。我々のばあい重要な文脈は植民地主義的に權力の問題を議論することではない。むしろ我々にとって特に議論すべき文脈は、キリスト教に代表されるが、場合により世界のいつどこにでも見出せるような遍在する宗教的「眞理」についてであり、そのような現象は、自分たちのほうが宗教的に優れていることを西洋が過去のアジアの文化の中に見て取ることであるから、それを私は新たに「超越的オリエンタリズム」と名付ける。

Max DEEG マックス・デーク

1958年生

ウィーン大學組織神學研究所教授 Dr. Phil. habil. (ヴュルツブルク大學)

主要著作 *Die altindische Etymologie nach dem Verständnis Yaska's und seiner Vorgänger* “Laozi oder Buddha?” “Von Integration zur Legitimation — Die Asoka-Legende (Asokavadāna) im buddhistischen Indien und in China” “Der religiöse ‘Synkretismus’ der chinesischen Kaiserin Wu Zetian — Versuch einer Staatsreligion” “Das Ende des Dharma und die Ankunft des Maitreya” ほか多数

Digging out God from the Rubbish Heap: The Chinese Nestorian Documents and the Ideology of Research

Max Deeg
(Universität Wien, Austria)

Research in humanities and cultural studies have undergone a change in recent years. There is an increasing awareness of the fragility of such concepts as (the positivist's) objectivity on the one side, and on the other of the dependency of scholars on their own personal background and academic tradition, which influence the method and way of research and even the choice of topics. The conclusion should be to look at these preconditions under which research was and is undertaken in order to appreciate one's own position as a researcher and—whenever necessary—to correct deficiencies stemming from this situation.

My paper will endeavour to trace some of these ideological and cultural presuppositions with the resulting problems in connection with the so-called Chinese Nestorianica from the Tang period. These documents in some respect represent an ideal material basis for such an undertaking because two cultural traditions and academic fields are involved: Theology in the broadest sense of the term and Orientalism in the most neutral sense. There is a remarkable gulf between those working in missiology, who make constant use of translations of such Chinese documents, and, for instance, the Chinese specialists who have discussed the authenticity and—to a certain extent—the contents of these texts. A point of contact is the English translation of the Chinese Nestorian texts by the Japanese Christian scholar Peter Yoshirō Saeki.

By way of some examples from the Nestorian stele of Xi'an and from the so-called Dunhuang-texts I will try to show how and why there is lack of communication between the two groups of "users" of the documents. I will concentrate on the non-specialists, mainly theologians (Gerhard Rosenkranz, Peter Chiu, Samuel Moffett, Martin Palmer), and on specialists of Religious Studies or Sinologists (Hans-Joachim Klimkeit, Li Tang) who, in the well-established tradition of Saeki, try to read Christian ideas and terms into the texts. They seek a sinicized interpretation of Christian concepts in Daoist, Buddhist or Confucian disguise—thus trying to "dig out God from the rubbish heap". I will also try to demonstrate the underlying ideology of this way of reading the texts in the broader context of the debate about Orientalism. In our case these interpretations are not done in a Colonialist discourse of power but rather in a specific discourse of all-pervading religious "truth", represented through Christianity and eventually to be found at any time and at any place in the world—a phenomenon which I label as "trans-orientalism" because it detects the West's own religious superiority in Asian cultures of the past.

唐代の佛教と道教からみた外道 — 景教徒

榮新江
(北京大學)

私は「歷代法寶記中の末曼尼と彌師訶」という一文中において、唐の大暦年間、劍南道の保唐宗の禪僧が、彼らの西天祖師が打ち負かした二人の外道を「末曼尼」と「彌師訶」と呼び、それはすなわちマニ教教祖と景教のイエス・キリストであったことを明らかにした（『中古中國與外來文明』北京、2001）。ティム H. バレットは *BSOAS* 第66巻 1 期（2003）に一篇の短文を發表し、この種のマニ教や景教を外道とみなすやり方は、敦煌本『老子化胡經』にも見えることを指摘し、さらに兩者にあり得た關係や年代の問題について検討した。本稿はより廣い唐代宗教史の發展の脈絡から、景教徒がどのように道教・佛教によって外道と見なされたのかを考察する。そして、景教が唐朝の都城に傳わってから、どのように『老子化胡經』中の外道に變わったのかを詳細に跡づけることにつとめたい。この種の外道のイメージはその後の佛道兩教に利用され、いくつかの文獻ではテキスト中の景教徒の外道のイメージを踏襲し、いくつかの文獻では當時當地の宗教鬭争の情勢を出発點として、景教徒とマニ教徒を敵對する外道勢力とみなし、皆殺しにしなければ氣分が悪いといった風であった。テキストと歴史兩方面の分析を通じて、異なる時期の宗教文獻の編纂は、文獻そのものの傳承を持つばかりでなく、當時の歴史背景とも關連するものであることが分かる。佛教と道教は權威ある地位を占める正統宗教となつて、景教に對して吸收から批判へと轉じる態度を採つたのである。景教徒は自らの足場が苦しいものであったために、時に自らを佛・道の中へと混同させていくものもあり、教徒の中には次第に「外道」から「正道」へと轉じたものもいた。

榮新江 RONG Xinjiang えい・しんこう

1960年生

北京大學歴史系暨中國古代史研究中心教授 博士生導師 中國唐史研究會理事、副會長 中國敦煌吐魯番學會常務理事

主要著作 《歸義軍史研究》《鳴沙集》《中古中國與外來文明》
《敦煌學十八講》《敦煌學新論》ほか多數

唐代佛道二教眼中的外道 — 景教徒

榮新江
(北京大學)

我在《歷代法寶記中的末曼尼與彌師訶》一文中，揭示了唐大曆年間劍南道保唐宗的禪僧把他們的西天祖師所打敗的兩名外道叫作“末曼尼”和“彌師訶”，即摩尼教教祖和景教的耶穌基督（《中古中國與外來文明》，北京，2001）。Tim H. Barrett在*BSOAS*第66卷1期（2003）上發表一篇短文，指出這種把摩尼教和景教視為外道的做法，又見於敦煌本《老子化胡經》，竝就兩者可能的關係和年代問題做了討論。本文從更廣闊的唐代宗教歷史發展脈絡上，來考察景教徒如何被道教、佛教看成是他們眼中的外道。力圖闡釋景教從傳入唐朝都城，如何變成《老子化胡經》中的外道，而這種外道的形象，為此後佛、道兩教所利用，有些文獻承襲了文本中景教徒的外道形象，有些則從當時當地宗教鬭爭的形勢出發，把景教徒和摩尼教徒視作敵對的外道勢力，必斬盡殺絕方才痛快。通過文本和歷史兩方面的分析，可以使我們認識到，不同時期宗教文獻的編纂，既有文獻本身的傳承，又和當時的歷史背景相關，而佛、道二教作為居於權威地位的正統宗教，對於景教採取從吸收到批判的態度。景教徒由於自身立足的艱難，有時也把自己混同到佛、道當中去，有些教徒也就逐漸從“外道”轉成“正道”了。

『歸眞總義』 — 中央アジアにおけるその源流

濱田正美
(神戸大學)

明末崇禎年間に、アーシク ‘Āshiq と名乗るひとりのインド人が南京に姿を現した。若干の中國人ムスリムが彼に師事したが、そのうちのひとり蘇州出身の張中なる人物は、師の講義を筆録し、鼎革の後になってこれを公刊した。これが『歸眞總義』と略稱される書物であり、明末から清代にかけて出現した数多くの漢文で著されたイスラーム文献のうち、最初期に属するもののひとつである。書名に採られている「歸眞總義」とは、アラビア語のイーマーン・ムジュマル *īmān mujmal* の漢譯に他ならない。イーマーン・ムジュマルはイーマーン・ムファッサル *īmān mufaṣṣal* と對になるイスラームの信條であって、一般にはシャハーダそのものを指すとされているが、この書物に見えるそれはシャハーダとは異なり、「私はその名と屬性によって（示されている）通りに神を信じる。そして私はその命令の全てを受け入れる」というものである。本書は漢字轉寫によるアラビア語本文、その漢譯、アーシクによる注、張中の疏から構成され、注と疏においては、イブン・アラビー流のいわゆる存在一性論が、ペルシア語文献からの引用を交えて解説されているが、禪佛教や新儒學から借用された用語が散見する。現在の中國イスラーム教の用語では、イーマーン・ムジュマルを「總信」、イーマーン・ムファッサルを「分信」と譯し、後者はいわゆる「六信」と同義とするが、奇妙なことに張中自身や康熙時代の劉智はこれを「七信」と数え、現在も一部ではこの数え方が踏襲されている。シャハーダとは異なる信條をイーマーン・ムジュマルと稱し、「六信」に代えて「七信」を数えることは、中國のイスラーム教特有の現象ではなく、その源流は14世紀以降の中央アジアで編纂され、現在も廣く流布している教理解説書『チャハール・キターブ *Chahār Kitāb*』に求めることができる。

濱田正美 HAMADA Masami

1946年生

神戸大學大学院文學研究科教授 文學博士（京都大學）

主要著作 「歸眞總義初探」 “L’inscription de Xiate (Shata)”

“Jihād, hijra et «devoir du sel» dans l’histoire du Turkestan oriental”

“Introduction (au numéro spécial: Saints et héros sur la Route de la Soie)” “Le mausolée et le culte de Satuq Boghrā Khān à Artush” ほか

多数

The *Guizhen zongyi* and its Central Asiatic Background

Hamada Masami
(Kobe University)

Towards the end of the Ming dynasty, an Indian Muslim named ‘Āshiq appeared in the city of Nanjing. Zhang Zhong 張中, one of ‘Āshiq’s Chinese students, wrote down his mentor’s lectures and published them after a long time as *Guizhen zongyi* 歸真總義 or Exegesis of *īmān mujmal*, a treatise preaching the theology of “oneness of being” and containing several terms borrowed from Buddhism and Neo-Confucianism as well as citations from Persian mystical literature. In Islamic theological terminology a distinction was made between *īmān mujmal* (summarized faith) and *īmān mufaṣṣal* (detailed faith). Generally the former indicates *shahāda* itself and the latter the so-called Six Beliefs. However, according to our text *īmān mujmal* is as follows: “I believe in God just according to His names and His attributes. I accept all of His orders”. As regards *īmān mufaṣṣal*, in Chinese Islamic literature it contains seven elements instead of six. These peculiarities originated in Central Asia and were introduced into Chinese Islam through *Chahār Kitāb*, a collection of didactical texts in Persian prose and verse elaborated since the 14th century and long considered as “the second most important book of Islam after *Qur’ān*”.

浄明道の祖師許遜にまつわる物語の再検討

ジュディス・マギー・ボルツ
(ワシントン大学、シアトル)

ブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館（カナダ・バンクーバー）に所蔵される一冊の畫集を私がはじめて知ったのは二十年ほど前のことである。『眞僊事蹟』と題されたこの畫集は、五十八點の一連の挿畫とそれにつけられた文章によって許遜（239－374）の物語を傳えている。冒頭の挿畫には蘇州の畫家謝時臣（1487－1567+）の署名と印があり、これには嘉靖25（1546）年の日付がある。

『眞僊事蹟』の後記には同じく1546年の日付があり、王拱楨という人物の名で記されているが、それによるとこの畫集は嘉靖帝に獻呈されるはずだったという。しかし嘉靖帝がかつてこの畫集を所有した證據は全くない。またこの畫集を謝時臣に歸するのが妥当かどうか、疑問の餘地がある。とはいえ許遜の傳説が當時なお生き續けていたことの證として『眞僊事蹟』の價值は看過さるべきではない。『眞僊事蹟』を道教經典に含まれる數多くの聖者傳と照らし合わせることによって、許遜その人について、さらに彼が浄明道の開祖たることについて、綿密な檢證が可能になるのである。

私は長年にわたり、折に觸れてこれらの文獻の校訂に取り組んできたが、有り難いことにこのシンポジウムに参加する機會を與えられ、この問題をあらためて取り上げるようになった。本報告ではとりわけ『眞僊事蹟』とこれに相い似た1445年版刻の道教經典『許太史眞君圖傳』との間に、いかなる符合と齟齬が見られるかに焦點を合わせる。これによって、注目に値するこの畫集が、正統的な傳承からの引き寫しであることがはっきりすると同時に、まぎれもなくその時代の所産であることも判明するのである。

Judith Magee BOLTZ ジュディス・マギー・ボルツ

ワシントン大学（University of Washington, Seattle）アジア言語文化學部 Affiliate Associate Professor. Ph. D.（カリフォルニア大学バークレー校）

主要著作 *A Survey of Taoist Literature, Tenth to Seventeenth Centuries*
“Notes on Modern Editions of the Taoist Canon” “Singing to the Spirits of the Dead: A Daoist Ritual of Salvation” “Not by the Seal of Office Alone: New Weapons in Battles with the Supernatural” ほか多數

Reconsidering the Story of Xu Xun, Patriarch of Jingming dao

Judith Magee Boltz
(University of Washington, Seattle)

Some twenty years ago I first became aware of a set of album leaves held by the Museum of Anthropology of the University of British Columbia in Vancouver, B.C., Canada. Titled “Zhenxian shiji” 真僊事蹟, it tells the story of Xu Xun 許遜 (239 – 374) in a sequence of fifty-eight illustrations with accompanying texts. The signature and seal of the Suzhou painter Xie Shichen 謝時臣 (1487 – 1567+) appear on the initial illustration, with the date Jiajing 嘉靖 25 (1546).

According to a postface in the name of a certain Wang Gongkui 王拱欝, also dated 1546, the “Zhenxian shiji” was meant to be presented to the Jiajing emperor. There is no evidence that it ever came into the possession of the emperor. The authenticity of the attribution to Xie Shichen also remains in question. Nonetheless, the value of the “Zhenxian shiji” as a testament to the vitality of the legacy of Xu Xun cannot be underestimated. It invites close examination in view of the vast body of hagiographic writings in the Taoist Canon concerning Xu Xun and his identity as patriarch of Jingming dao 淨明道.

Although I have worked on a collation of these texts off and on over the years, it is the invitation to participate in this Symposium, for which I am grateful, that has led me to take up the subject again. Here we will focus primarily on the ways in which the “Zhenxian shiji” both corresponds to and diverges from its closest counterpart in the 1445 woodcut Taoist Canon, the *Xu Taishi zhenjun tuzhuan* 許太史真君圖傳. This remarkable set of album leaves, we will find, is not only clearly derivative of canonic lore but is also unmistakably a product of its time.

儀禮の解明 — 齋に對する陸修靜の影響

フランシスクス・ヴェレレン
(フランス國立極東學院)

道教の歴史に對する陸修靜(406-477)の貢獻は、とりわけ以下の三つの點について長らく認められてきた。すなわち、天師道教團の改革、最初の道教經典の編纂、そして當時成ったばかりの靈寶經(400年ごろ)とそれが傳える佛教の影響を受けた新たな祭式の獎勵である。陸修靜は初期天師道教團の斷固たる擁護者であるかに見えるが、同時代の宗教的實踐についての彼の見解には、上清經や靈寶經からの道教の新たな啓示ばかりでなく、大乘佛教の信仰や儀禮に對する中國人の強い興味も取り込まれている。陸修靜の宗教上の信條や人柄を鮮やかに知ることができるのは、五世紀の江南で弟子たちや道教教團に授けられた彼の教えが記録されたおかげである。とりわけ陸修靜の講義説法は、齋の儀禮の執行に先行する彼の個人的見解を如實に傳える。本稿では、現存する陸修靜の著作の梗概を示しつつ、齋の目的と意味、その執行の規則、そしてその實踐者に要求される心構えについての彼の教説に焦點を合わせる。

Franciscus VERELLEN フランシスクス・ヴェレレン

1952年生

フランス國立極東學院 (EFEO: École Française d'Extrême-Orient)

院長 Ph. D., Habilitation (パリ大學)

主要著作 *Du Guangting (850-933): taoïste de cour à la fin de la Chine médiévale* “The Twenty-four Dioceses and Zhang Daoling: spatio-liturgical organization in early Heavenly Master Taoism” “The Heavenly Master liturgical agenda: The Petition Almanac of Chisong zi” *The Taoist Canon: A Historical Companion to the Daozang* (Co-editor) ほかに多数

The Illumination of Ritual: Lu Xiujing's Reflections on the Retreat

Franciscus Verellen
(École Française d'Extrême-Orient)

Lu Xiujing's 陸修靜 (406 – 477) exceptional contributions to the history of Taoism have long been recognized, especially in three areas: his reform of the Heavenly Master community, his organization of the first Taoist canon, and his patronage of the recent Lingbao scriptural corpus 靈寶經 (ca. AD 400) together with its new, Buddhist-influenced liturgy. A seemingly staunch defender of the early Heavenly Master church, Lu's views on religious practice in his time embraced not only the new Taoist revelations of the Shangqing 上清 and Lingbao scriptures, but also the mounting Chinese enthusiasm for the beliefs and rituals of Mahāyāna Buddhism. Thanks to the patriarch's recorded instructions to his disciples and the Taoist community in fifth-century southern China, we are able to form a vivid appreciation of his religious convictions and personality. Lu's sermons, especially, preserve the intimacy of his private pronouncements prior to performing the Retreat 齋 ritual. The present paper, besides offering a synopsis of Lu's extant oeuvre, will focus on the patriarch's teachings on the purpose and meaning of the Retreat, the rules for performing it, and the spiritual preparation required of its practitioners.

清代における金蓋山龍門派の設立と『金華宗旨』

モニカ・エスポジト
(京都大學)

『金華宗旨』は著名な内丹書で、その存在は1929年にリチャード・ウィルヘルムの翻譯を通じて西洋に知られることとなった。この翻譯は、*Das Geheimnis der Goldenen Blute: ein chinesisches Lebensbuch* というタイトルで出版され、カール・ユングの解説が寄せられている。ウィルヘルムが底本として使用したのは1921年から1927年にかけて出版された湛然慧眞子版で、これは、その序文に説明されているように、書店と古物商がひしめく北京の琉璃廠で発見されたのであった。實際、『金華宗旨』には数多くの版本が現存している。そして、それら全てが、神仙・呂洞賓に歸せられているのだ。こうした版本の成立は、總じて清代(1644–1912)にまで遡ることができ、道教の様々な支派や傳統に属している。

私の知る限り、『金華宗旨』には少なくとも七種の異本が存在し、その中でも稀覯なものが京都の大谷大学圖書館に所蔵されている。扶乩によって啓示されたこのテキストは、多くの道教支派や傳統に用いられていた。『金華宗旨』には、原本の再構成に関わった道教の支派や傳統それぞれの特徴が残されている。(例えば『金華宗旨』には様々な乩壇の構成員の手による序がつけられており、彼らがどのようにしてこのテキストを授かり、どのように校正したかが語られている。) 様々な版本の序、注、そして十三章からなる内容を比較してみると、それぞれの異同や遺漏が明らかになる。清代に公開戒壇を擔っていた、道教の重要な一派である龍門派は、彼らの煉丹思想の基礎としてこのテキストを使用していたのみならず、その教徒たちに傳戒を行う靈的な根據ともしていた。なぜなら、このテキストは龍門派が護持する正純な教義を象徴するとともに、このテキストの所持のお陰で正統な傳戒を續けていくことができる、と考えられていたからである。彼ら自身が原本の所有者であると立證するために、また正當な流傳を受持した者であるという美德によって、金蓋山龍門派の師たちは独自の基準に則って『金華宗旨』を修正、校正した。

『金華宗旨』の版本を分析し、また正當性を主張する龍門派の原典上の異同を研究することで、清代道教と、こうした書物の正統な受持者であることを主張する様々な道教支派の奮闘に、光を當てることができるだろう。

Monica ESPOSITO モニカ・エスポジト

京都大學人文科學研究所助教授 Ph. D. (パリ第七大學)

主要著作 *L'alchimia del soffio* “Longmen Taoism in Qing China: Doctrinal Ideal and Local Reality” “The Longmen School and Its Controversial History during the Qing Dynasty” “Daoism in the Qing” ほか多数

The Secret of the Golden Flower and the Establishment of the Longmen Tradition at Mt. Jin'gai during the Qing Dynasty

Monica Esposito
(Kyoto University)

The *Secret of the Golden Flower* (*Jinhua zongzhi* 金華宗旨) is a famous alchemical text which the Western world came to know through Richard Wilhelm's 1929 translation. It was published, together with Carl Jung's commentary, under the title *Das Geheimnis der Goldenen Blüte: ein chinesisches Lebensbuch*. The Chinese text used by Wilhelm is Zhanran Huizhenzi's 湛然慧真子 edition, published between 1921 and 1927 and found, as its preface explains, in Beijing's Liuli chang 琉璃廠, the old street of books and antiques dealers. In reality, many other versions of the *Golden Flower* text exist, all traditionally attributed to the immortal Lu Dongbin 呂洞賓. They date back to the Qing dynasty (1644–1912) and belong to various Daoist lineages and traditions.

So far I discovered at least seven editions of this text, among them a rare one at the Otani University Library in Kyoto. The text is a product of spirit-writing seances. Each Daoist lineage and tradition which engaged in its compilation left its marks. Through comparison of prefaces, notes, and the thirteen chapters of the *Golden Flower* in its different editions, relevant variants as well as omissions become apparent. The Longmen 龍門, an important Daoist tradition which during the Qing dynasty was charged with transmitting public ordinations, used this text not only as basis for its alchemical doctrine but also for establishing its spiritual power of transmitting ordinations among its followers. In order to assert themselves as the holders of the original version and by virtue of being the unique recipients of the true transmission, the Longmen masters from Mount Jin'gai 金蓋 (Zhejiang) modified and edited the *Golden Flower* according to their own criteria.

Through analysis of its various versions and study of the textual inconsistencies in the Longmen's claim to legitimacy, we can shed light on Qing Daoism and on the struggles among the Daoist traditions which claimed to have the orthodox transmission of such text.

天書雲篆 — 道教の符圖文獻とその分析

李遠國

(四川社會科學院)

符圖とは道教の符籙と靈圖を指す。しばしば呪術と併用され、道教の「道を廣め、世を救う」主要な手段となる。道教の加持祈禱の儀式において、あるいは修練養生の際において、随時随處にみな符圖の使用が認められる。現在、『正統道藏』、『萬曆續道藏』、『道藏輯要』、『藏外道書』等の叢書には計2783種の道教文獻が収録されるが、そのうち符圖にかかわる著作は約700餘種あり、卷數は一千卷にも達する。符籙や靈圖なくして道は成らず、符圖は道教の最も明確な一種の文化標識といえるだろう。

漢から唐の時期にかけての天師道・上清派・靈寶派・三皇派から宋元時代の神霄派・清微派・北帝派・淨明派・閻山派に至るまで、いずれもみな符圖の效用を非常に重視した。またそれぞれに傳承があり、きわめて豊富な文獻資料を遺した。

符圖の種類について言えば、およそ三種類に分けることができる。すなわち、星座・流れゆく薄雲・雷鳴や稻妻・風雨のような符圖は、天文・氣象・生態等と關係しており、これらを「天象符」と呼ぶ。環境や建築・家屋の領域に廣汎に活用される符圖は「地理符」である。さまざまな種類の内鍊符・修真符・治病符・驅邪符は、いずれも人々の生命活動や身體の健康とかかわりのある符圖なので、「人體符」に含めることができる。

符圖の構成には、粗放から精緻へという發展過程がある。早期の符圖にはあきらかに規範と條理が缺乏しているうえ、さらに理論的には血が通わず無力なこともあって、「學」とはみなしがたい。しかし宋元以降は、抜本的な變化が生じ、中國哲學の元氣論および儒・佛・道三教の生命學を採用して理論の基礎となし、符圖の致命的な内傷を修繕した。それと同時に、符圖に内在する構成の規範化・序列化・條理化を非常に重視し、かくして昇華したそれをひとつの學説とした。それが「符圖學」にほかならない。

李遠國 LI Yuanguo リ・えんこく

1950年生

四川省社會科學院哲學研究所副所長、研究員、教授

主要著作 《道教氣功養生學》《中國道教氣功養生大全》《神霄雷法：道教神霄派沿革與思想》ほか多數

天書雲篆 — 道教符圖的文獻及其分析

李遠國

(四川社會科學院)

符圖，是指道教的符籙和靈圖。它往往與咒術并用，成為道教宏道濟世的主要手段。在道教的科儀齋醮中，或其煉養修持中，隨時隨地都可見到符圖的應用。今《正統道藏》、《萬歷續道藏》、《道藏輯要》、《藏外道書》等叢書中，共收有道教文獻2783種，其中涉及符圖的著作約有700餘種，卷數多達千卷。可以說，無符無圖不成道，符圖是道教最鮮明的一種文化標志。

從漢唐時期的天師道、上清派、靈寶派、三皇派，到宋元之際的神霄派、清微派、北帝派、淨明派、閻山派，他們都非常重視符圖的功用，並各有傳承，留下了極為豐富的文獻資料。

就符圖的種類而言，大致可分為三類：如各種星宿、雲氣、雷電、風雨之符，它們與天文、氣象、生態等有關聯，這類叫做天象符。被廣泛地運用於環境、建築、房屋領域的各種符圖，這類就是地理符。各種各樣的內煉符、修真符、治病符、驅邪符，凡是與人們的生命活動、身體安康有關聯的符，則可歸入人體符。

符圖的結構，有一個從粗糙到精微的發展過程。早期符圖明顯地缺乏規範與條理，再加上理論上的蒼白無力，難以謂之為“學”。但宋元以後發生了根本的變化，它採用了中國哲學的元氣論及儒、釋、道三教性命之學，作為其理論基礎，從而彌補了符圖的致命內傷。同時非常重視符圖內在結構的規範化、有序化、條理化，從而使其上升為一門學說，即“符圖學”。

靈寶の「天文」信仰と古靈寶經の教義の展開 — 敦煌本『太上洞玄靈寶真文度人本行妙經』 を中心として

王承文
(中山大學、廣州)

東晉から南北朝にかけて相次いで世に出た各種の道教の經典のなかで、古靈寶經は、各派の經典の教義の整合性をとくに重視し、中古の道教が統一性を備えた經典教義の體系を構築するにあたって、もっとも深い影響を及ぼした。敦煌本『太上洞玄靈寶真文度人本行妙經』は、明代の『正統道藏』には収録されていない古靈寶經の殘卷である。この靈寶經典は、中古道教の重要な神である太上大道君・五老上帝等の徳行功業の因縁話と靈寶の「天文」信仰を結合して、漢・晉以來、わが國の宗教の神學の傳統に全く新しい解釋を展開した。

本稿では、そのうち太上大道君自體は、早期の上清派の經典である『上清高聖太上大道君洞真金元八景玉籙』に由來することを論證する。しかし、古靈寶經は、すでにこの上清派のもっとも重要な神格から新たに原始天尊の下で靈寶の教法を専ら推し進める神像を創り上げていたのであり、その身の上話、經歷は、最初から最後まで靈寶の「天文」と繋がりあっていた。太上老君は早期の天師道の最高神とされていたが、同様に改造されて靈寶の教法を講説する神となった。元始天尊・太上大道君・太上老君は中古の道教の神々の體系の中でもっとも代表的な神とされるが、靈寶の天文の信仰と教義が順序をつけて一緒に並べたものである。この思想は、唐代における道教の統一された經典教義體系の重要な組織構成部分たる「三清神」の出現にも直接的な影響を與えた。しかるに南朝の上清派は元始天尊の唯一最高の地位を承認はしたけれども、依然として太上大道君を上清經の神靈とする傳統を擁護する努力を續けた。南北朝から唐宋までの道教典籍の中にあっては、二人の太上大道君が同時に並び立つ奇妙奇天烈な現象が出現する。このため、本稿では、一つの重要な方面から、靈寶の「天文」信仰が古靈寶經の教義の體系の中の核心的な位置を占め、同時に中古の道教史研究の鍵となる神が「體系化」と「秩序化」に向って進んでいく過程をも反映していることを證明する。

王承文 WANG Chengwen おう・しょうぶん

1962年生

中山大學歴史系教授 歴史學博士(中山大學)

主要著作 《敦煌古靈寶經與晉唐道教》〈敦煌本《太極左仙公請問經》考論〉《〈隋書・經籍志・道經序〉與道教教主元始天尊的確立》ほか多数

靈寶“天文”信仰與古靈寶經教義的展開 ——以敦煌本《太上洞玄靈寶真文度人本行妙經》 為中心

王承文
(中山大學、廣州)

在東晉南北朝相繼問世的各種道教經典中，古靈寶經尤其重視對各派經典教義的整合，對中古道教具有統一性的經教體系的建立影響尤為深遠。敦煌文書《太上洞玄靈寶真文度人本行妙經》，是一部明代《正統道藏》未收錄的古靈寶經的殘卷。這部靈寶經將中古道教重要尊神太上大道君、五老上帝等的行業因緣與靈寶“天文”的信仰結合起來，對漢晉以來本土宗教神學傳統進行了完全新的詮釋。

在本文中，我們證明了其中太上大道君本身來源於早期上清派經典《上清高聖太上大道君洞真金元八景玉籙》。但是古靈寶經已將這一上清派的最重要尊神，重新塑造成元始天尊之下專門推行靈寶教法的神靈，其身世經歷始終與靈寶“天文”相聯繫。太上老君作為早期天師道的最高神靈，同樣被改造成一個宣講靈寶教法的神靈。元始天尊、太上大道君、太上老君作為中古道教神靈體系中最有代表性的尊神，是靈寶天文的信仰和教義使之有序地排列在一起。這一思想也直接影響了唐代作為道教統一經教體系重要組成部分的“三清神”的出現。而南朝上清派雖然承認元始天尊的獨尊地位，但是仍然努力維護太上大道君作為上清經神真的傳統。以至在南北朝到唐宋道教典籍中，出現了兩個太上大道君同時並存的奇特現象。因此，本文從一個重要方面證明了靈寶“天文”信仰在古靈寶經教義體系中的核心地位，同時也反映了在中古道教史上具有關鍵意義的神靈走向“體系化”和“秩序化”的過程。

道教類書と教理體系

麥谷邦夫
(京都大學)

中國における類書の歴史は、先秦時代の『呂氏春秋』や前漢の『淮南子』にまで遡ることが可能である。しかし、『皇覽』をはじめとする本格的類書が編纂されるのは、魏晉南北朝、とりわけ五世紀以降のことである。この時代は、學術・文化のうえでは佛教の流入定着と道教の成立という大きなできごとがあった。あらゆる書物からの網羅的抄録を分類整理して、膨大な知識を簡便に提供することを目的とした類書の内容にも、このような學術・文化の新しい潮流が反映されることになる。類書の性格がこのようなものである以上、その構成には當然のことながら編纂者の世界観が反映されることになる。とりわけ、佛教なり道教なりに特化した類書であれば、その教理體系への理解が明確な形で類書の構成に反映されていると考えられる。

佛教に特化した最初の類書が編纂されるのは、南朝梁の武帝の時代であった。彼は『華林遍略』の編纂を命ずるとともに、『衆經要抄』次いで現存する最古の佛教類書である『經律異相』の編纂を命じた。こうした佛教類書の編纂には、經典の結集と目録の編纂という前提条件が必須であったと考えられている。

一方、ほぼ時を同じくして、北朝においても周の武帝の命によって、最初の道教類書ともいべき『無上祕要』が編纂された。佛教類書の編纂同様、『無上祕要』の編纂に先立っては、道典の結集と目録の編纂とが前提条件となっていたと考えられる。北周では通道觀という國立の宗教研究所に相当するものが設置されてその役割を擔ったと考えられるが、その活動の実態はかならずしも明かではない。本論では、『無上祕要』や隋唐時代の道教類書の分析を通じて、そこに反映された道教教理體系の特徴や類書という形態の持つ役割を検討する。

麥谷邦夫 MUGITANI Kunio

1948年生

京都大學人文科學研究所教授

主要著作 『周氏冥通記研究(譯注篇)』 「穀食忌避の思想 — 辟穀の傳統をめぐって」 〈南北朝隋初唐道教教義學管窺 — 以《道教義樞》爲線索〉 「『大洞真經三十九章』をめぐって」 「陶弘景の醫藥學と道教」 ほか多数

The Daoist Doctrinal System through the Mirror of *Leishu* Encyclopedias

Mugitani Kunio
(Kyoto University)

Though the history of the encyclopedic books called *leishu* 類書 may go back to the Pre-Qin period's *Lüshi chunqiu* 呂氏春秋 and the Former-Han's *Huainanzi* 淮南子, the compilation of the first typical work of this kind, the *Huanglan* 皇覽, took place at the time of Emperor Wen of the Wei (220 – 226). Thereafter, many *leishu* were compiled during the Wei, Jin, Southern and Northern Dynasties, especially after the 5th century of the Common Era. From the point of view of learning and culture, this period was characterized by two important historical events: the importation and establishment of Buddhism in China, and the formation of Daoism. It is only natural that such momentous events came to be reflected in the contents of these texts, whose aim is to furnish—in the form of thematically arranged collections of comprehensive quotations from older books—an enormous amount of knowledge in a handy format. In view of their specific character, quite naturally the editors' worldviews are also reflected in them. In a *leishu* of Buddhist or Daoist tendency, then, one would expect to find an understanding of the respective doctrinal system, clearly expressed through the structure of the work itself.

The first Buddhist encyclopedias were compiled during the era of Emperor Wu of the Liang. First Emperor Wu ordered the compilation of the *Hualin bianlüe* 華林遍略, and next that of the *Zhongjing yaochao* 衆經要抄 and the *Jinglü yixiang* 經律異相, which are the oldest extant texts of their kind. The redaction of such Buddhist *leishu* could not take place without earlier compendia and catalogues of scriptures.

Around the same time, on the Daoist side, Emperor Wu of the Northern Zhou ordered the compilation in North China of the first Daoist encyclopedia, the *Wushang biyao* 無上祕要. As in the case of the two above-mentioned Buddhist encyclopedias, such a compilation could not occur without compendia and catalogues, in this case of Daoist scriptures. It is possible that during the same Northern Zhou Dynasty the Tongdao guan 通道觀—a kind of national research institute for religion—was established specifically for this purpose. Its actual activities, though, remain elusive.

In this paper I will examine the characteristics of the Daoist doctrinal system reflected in the *Wushang biyao* and other Daoist *leishu* from the Sui and Tang dynasties, as well as the function of the *leishu* genre in the Daoism of the times.

寶卷と明清の民間信仰 ― 目連傳承を中心にして

小南一郎
(京都大學)

中國撰述の佛典と推測される『佛說盂蘭盆經』に起源する、中國における目連傳承は、佛教傳説という範圍を越えて獨自に展開をし、敦煌で發見された文書の一つ、『大目乾連冥間救母變文』に、ひとまずの結實をした。慳貪の心の深い目連の母親は、その報いとして餓鬼道に墜ちるとというのが元來の筋書きであったはずであるが、『目連變文』においては、目連の母親は阿鼻地獄に墜ちたとされ、その母親を求めて地獄を遍歴する目連の姿が、語り物文藝の形式で、詳細に描寫されているのである。

目連傳説は、敦煌における文藝の中で、一定の完成を見せたあと、それまでとは異なった文藝の基調でもって、新しい方向へと展開をし、現在にまでつながっている。宋代にも目連をめぐる傳承文藝が盛んに行なわれていたであろうことは、『東京夢華錄』などの、當時の都市の繁盛記を通してうかがうことができる。ただ、具體的にいかなる筋書きのものであったのかを知ることができる資料はほとんど遺ってはいない。そうした資料や實際の作品が遺るのは、元代以降、とくに明清時期になってからなのである。目連傳承は、元來から死者救済の儀禮と密接に關連しつつ展開して來たと考えられるが、その傳承と死者との關係は、むしろ明清時期になった方が、よりあからさまに示されるようになる。

この時期において、目連傳承を文藝化し、作品として定着させる枠組みとなったのは、演劇と語り物文藝とであった。演劇としては、明の鄭之珍『目連救母勸善戲文』が代表的な作品であって、それ以後の目連をめぐる傳承は、多かれ少なかれ、みな、この作品の影響を被っていると言ってよいであろう。一方、語り物文藝としては、いく種類かの目連寶卷が遺されている。寶卷文藝は、敦煌の變文のあとを承けた、佛教的な語り物文藝だと位置づけられているが、兩者の間には、相當に異なる要素があることも無視してはならないであろう。そうした質的な相違の中に、中國近世社會の特徴的な構造が反映されていると考えられるのである。

小南一郎 KOMINAMI Ichirō

1942年生

京都大學人文科學研究所教授 文學博士（京都大學）

主要著作 『楚辭とその注釋者たち』 『西王母と七夕傳承』 『中國の神話と物語』 「『盂蘭盆經』から『目連變文』へ ― 講經と語り物文藝の間」 『中國の禮制と禮學』（編著）ほか多数

Precious Scrolls and Folk Beliefs during the Ming and Qing Dynasties, with Special Reference to the Mulian Literary Tradition

Kominami Ichirō
(Kyoto University)

The Mulian 目連 literary tradition originated in China from a Buddhist sutra—the *Yulanpen jing* 盂蘭盆經, supposedly composed during the Six Dynasties by Chinese people. Transcending the limits of Buddhist legends, it reached its maturity in the *Damuqianlian mingjian jiumu bianwen* 大目乾連冥間救母變文, one of the texts found at Dunhuang. Originally, the plot of the stories had Mulian's mother falling into the realm of "Hungry Ghosts" (*eguidao* 餓鬼道) because of her avarice, but in the *Damuqianlian mingjian jiumu bianwen* she falls into hell. Consequently, this text describes in narrative form Mulian's wandering in hell as he is looking for her.

The story of Mulian, which in the literature from Dunhuang shows a fixed form, subsequently developed in new directions, still visible in contemporary folk-literature. Probably, the genre was also popular during the Song period, as we can see from works depicting the splendor of urban life such as the "Record of the Dreamlike Prosperity of the Eastern Capital" (*Dongjing menghua lu* 東京夢華錄). However, in the material left to us there is no indication about the plot of the legends current at that time. Such kind of source material as well as extant texts all date from the Yuan period onward, and particularly rich are the sources from the Ming-Qing period.

The relation with rituals for saving the dead—an element present in the Mulian tradition from the very beginning—assumed special prominence in Ming-Qing texts. In those periods the stories acquired definitive literary forms such as drama or narrative literature. Regarding drama, the most representative work of the Ming period is the *Mulian jiumu quanshan xiwen* 目連救母勸善戲文 by Zheng Zhizhen 鄭之珍, which in one way or another influenced almost every work after it. Narrative literature, on the other hand, is represented by several of the so-called "Precious Scrolls", or Baojuan 寶卷. Many scholars have placed this genre in the Buddhist narrative tradition that succeeded the Dunhuang Bianwen 敦煌變文. However, we cannot ignore the remarkable differences that actually exist between Bianwen and Baojuan texts. In these qualitative variations the characteristic structure of modern Chinese society is reflected.

デジタル化した古籍校勘版本の処理技術 — CBETA 大正藏電子佛典を例として

釋惠敏

(國立台北藝術大學、台灣)

中國の漢譯佛典は、後漢に始まり元代に至る。前秦の道安から隋唐時代に至るまで、佛典を蒐集・分類して目録を編纂し、それらを「一切衆藏經典」「一切經藏」「大藏經」と總稱したが、流通はすべて書寫に依存した。宋の開寶四年（971）にいたり「開寶藏」と呼ばれる刻印（木版印刷）版本が始まり、日本・契丹・西夏・高麗の諸國や國內各地に頒布した。この後、契丹藏（丹本）・金藏（趙城本）・萬壽藏・毘盧藏・圓覺藏・資福藏・磧砂藏等の宋朝版本および韓國の高麗藏がつくられた。元代には普寧藏・弘法藏等が、明代には南藏・北藏等が、清代には龍藏が刊行された。

中華電子佛典協會（CBETA）は、現在ひろく學界で使用されているところの、日本の大正時代の1924年から、1934年にかけて編輯・出版された藏經（略稱『大正藏』）を底本とし、デジタル化の作業を進めている。『大正藏』は高麗本を底本とし、宋・元・明の三本を對校し、別に正倉院聖護藏、敦煌古本およびパーリ語・サンスクリット語經典を參照し、あわせて校勘欄の中で各版本の用字の異同等の情報を記録している。CBETAは電子佛典を製作する過程でこの校勘情報をXMLで記録し、あわせてHTML方式で表示し、校勘情報から部分的に版本を復元し、利用者が、異なる版本を選択して拾い読みできるようにした。この作業の過程とその表示方法は、あるいはデジタル化した古籍校勘版本の處理技術の參考となるかもしれない。

釋惠敏 SHI Huimin しゃく・えびん

1954年生

國立台北藝術大學教授 法鼓山中華佛學研究所副所長 中華電子佛典協會主任委員 文學博士（東京大學）

主要著作 《中觀與瑜伽》『「聲聞地」における所縁の研究』“A Study on Creation and Application of Electronic Chinese Buddhist Texts: With the Version Comparison and the Commentaries of Yogacarabhumi as a Case Study” 〈雲和尚長時住定經驗之探索〉 ほか多数

數位化古籍校勘版本處理技術 — 以 CBETA 大正藏電子佛典為例

釋惠敏

（國立台北藝術大學、台灣）

我國漢譯佛典，起自後漢，迄於元代。苻秦道安乃至隋唐，雖有蒐集分類，編成目錄，總稱佛典為「一切衆藏經典」、「一切經藏」、「大藏經」，但是流通皆賴書寫。直至宋開寶四年（971）始刻印（木版印刷）版本，稱為開寶藏，並頒賜給日本、契丹、西夏、高麗諸國，以及國內各地。此後有契丹藏（丹本）、金藏（趙城本）、萬壽藏、毘盧藏、圓覺藏、資福藏、磧砂藏等宋朝版本，以及韓國的高麗藏；元代有普寧藏、弘法藏等；明朝刊刻南藏、北藏等；清朝的龍藏。

中華電子佛典協會（CBETA）採用目前廣為學術界使用的日本大正時代開始（1924～1934）編輯出版的藏經（簡稱《大正藏》）為底本，進行數位化的作業。《大正藏》是以高麗本為底本，對校宋、元、明三本，另參照正倉院藏經、敦煌古本及巴利文、梵文經典，並在校勘欄中記錄了各版本的不同用字等資訊。CBETA 在製作電子佛典的過程中，將這些校勘資訊以 XML 記錄，並以 HTML 方式呈現，藉由校勘資訊做部份的版本還原，讓使用者可以選擇瀏覽不同版本。此作業過程及其呈現方式或許可作為數位化古籍校勘版本處理技術的參考。

大規模佛教文獻群に対する確率統計的分析の試み

師茂樹

(花園大學、京都)

文獻研究には、何らかの假説が必要である。例えば、ある研究者が無数にある文獻の中からどれかを選び出し読み始めるとき、その選擇の背景には文獻に対する知識や先行研究、研究者の關心などに基づいた何らかの假説が形成されているはずである。電子テキストに対する検索もまた、テキストの内容や表現をあらかじめ知っていなければ、有意な結果が出にくい場合が多い。

近年、佛教文獻をはじめとする漢字文獻の電子化が急速に進み、研究環境は大幅に進歩したように思われる。しかし、研究者の知識の範囲を大きく超える大規模な文獻群を扱うことができる現在の環境においては、假説を前提とする従來の方法が通用しなくなっている。大規模な電子文獻群を扱うための方法論の検討が、大きな課題となっている。

情報科學の分野では、大規模なデータベースの中から、確率・統計やパターンマッチなどの技術によってパターンを発見し、發想や假説生成を支援する技術であるデータマイニングが注目されている。古典テキストの計量的な分析はこれまでも行われてきたが、文獻學者の假説形成のために用いられることはほとんどされてこなかった。

本發表では、大規模な佛教文獻データベースに対して、確率・統計的手法による分類を通じて、文獻研究につながるような假説の形成を試みることで、大規模電子文獻を扱うための方法論について考えてみたい。その際、具體的には玄奘譯とされるすべての漢譯佛典を對象とし、コンピュータによる分類と従來の文獻學的研究の比較を行いたい。

師茂樹 MORO Shigeki

1972年生

花園大學文學部講師

主要著作 「データベースがもたらすもの — コンピュータの中の歴史/物語」 「思想史としての文字情報処理 問題提起として」 「清辨比量の東アジアにおける受容」 ほか多数

The Statistical Analysis of Large-Scale Groups of Buddhist Texts

Moro Shigeki
(Hanazono University, Kyoto)

A philological study needs a hypothesis. When a scholar chooses a text from innumerable possible options and begins to read it, behind this choice there are usually hypotheses based on knowledge of that text, previous research, personal interest and so on. In the same way, the retrieval of an electronic text often does not produce significant results without any prior knowledge of its contents and linguistic expressions.

In recent years, the digitization of Chinese classical texts, including Buddhist texts, has progressed rapidly, and it seems that we have now a much more favorable environment for research. In this new environment it is possible to deal with large groups of texts, far beyond the knowledge of individual researchers, and the traditional method of research, based on an initial hypothesis, has become obsolete. Thus there is the need to develop a new methodology to handle such large amounts of materials.

In the field of computer science the technology called “data mining” is worthy of attention. Thanks to statistical analysis and data-matching, this technology helps the formation of hypotheses and concepts by discovering patterns in large databases. Although a number of studies have been carried out about the statistical analysis of classical texts, little is known about its application to hypothesis-formation in the field of philological studies.

In this presentation, I would like to examine a possible way of handling large-scale text databases, and in order to do this I will try a method for producing hypotheses through classification by statistical cluster analysis applicable to philological research. As an example, I will use all of the translations attributed to Xuanzang and make a comparison between computer-based classification and traditional methods of research.

唐代ナリッジベースから見た禪宗

クリスティアン・ウィッテルン
(京都大學)

「唐代研究ナリッジベース」を構築するための準備作業が人文科学研究所において始まった。この計画は唐代研究に関するあらゆる情報を総合的なデータベースにまとめるための技術と基礎データを用意することを目的とする。まだ開始して日も浅いため成果を十分な形で発表することはできないが、早期の段階で専門分野における問題意識とその対応を検討し、研究者の意見を取り入れることが重要と思われる。

現段階では中国の正史文獻がナリッジベースの主な柱の一つである。そこに描かれる禪宗のイメージと、禪宗文獻から得られる自己像とはかなり異なるという第一印象は誰しも抱くであろう。しかし一方で、両者の記述する出来事は共通の文化的状況のうちに発生したのであるから、そこには何らかの種類の重なり合いがある筈である。

本稿では、唐代ナリッジベースがこうした問題に対応可能かどうか、そしてそのためにはどのような内部構造が必要となるかを検討してみたい。当然ながら絶対的な解答はないが、実験的にどんな方向に進めばよいかということを目ざしてみたい。

Christian WITTERN クリスティアン・ウィッテルン

1962年生

京都大学人文科学研究所助教授 Ph. D. (ゲッティンゲン大学)

主要著作 “Introduction to KanjiBase. A Practical Approach to the Encoding of Variant and Rare Characters in Premodern Chinese Texts”
Das ‘Yulu’ des Chan-Buddhismus. Die Entwicklung vom 8. – 11. Jahrhundert am Beispiel des 28. Kapitels des Jingde chuandenglu (1004) “Buddhist Studies in the Digital Age” ほか多数

The Chan School as Seen through the Tang Knowledgebase

Christian Wittern
(Kyoto University)

At the Institute for Research in Humanities, work has begun recently on a project that aims at constructing a “Knowledgebase of Tang Civilization.” This project is intended to develop a comprehensive database of all information relevant for the study of the Tang. While this project is still in the very early stages of its development, it seems important to think of how it could be used to look for answers to complex research questions.

Due to the different perspectives and objectives of official historiography (on which currently the content of the Knowledgebase is based) and Chan-Buddhist chronicles, there is little common ground to a casual observer. On the other hand, the events these sources purport to report on, did take place in a common cultural setting, so there must be some kind of overlap.

The question this presentation tries to clarify is, whether the Knowledgebase can be used to make up for this kind of discrepancy and what specific requirements would be needed to find more of a common ground. It goes without saying that at this moment there can be no definite answer; but rather, some experiments might show the direction to proceed in.

雲居寺の碑文 — CD-ROM のための準備作業

マティアス・アーノルド
(ハイデルベルク大学、ドイツ)

房山の雲居寺は五世紀以上にわたって、佛教經典を刻んだ一萬五千以上もの石碑を産み出してきた。特別な出来事を記念するために、幾つもの碑文が記されてきたのである。それらのうち、616年から1999年にかけて書かれた二十八點の碑文が分析され、翻字され、翻譯されている。

これらの資料へのより容易なアクセスを提供するために、テキストの CD-ROM 化が必要であるが、その概念とデザインの両面において、いくつかの問題が生じる。それらのうち最も重要なのは以下の三點である。

第一に、テキストはいくつかの異なった形で提示されねばならないということ。すなわち、利用者は活字に起こしたものと拓本原姿とを対照させたり、注釋を施した中國語文と英語譯とを對應させたりしながら読むことができるようにすべきである。碑文の一部を擴大して見たり、逆に全體像を表示させたりすることが必要な場合もあるだろう。別のウィンドウに表示されたテキストも、必要とあれば、この動きや擴大縮小に連動できなければならない。

第二に、テキストの解讀についてはこれまで多くの研究がなされてきている。いくつかの碑文は斷片的にのみ残っていたり、浸食によってダメージをうけていたりするため、異なる読みや解釋が存在する。それゆえ CD-ROM はこれらのヴァリエントを提示する手段を提供せねばならない。

第三に、碑文は、佛典を石に刻むという巨大プロジェクトに関する様々な情報をもたらしてくれる。たとえば、他のいかなる資料にも見られないような多くの人物がそこに言及されているのである。このため、CD-ROM は全文検索を提供するのみならず、特殊なインデックスや関連情報をも提供しなければならない。

本論文においては、ユーザー・インターフェースの紹介とともに、上述の三つの複合的問題點に対する解決策が論じられる。それはまた CD-ROM 開發の現段階を紹介し、この進行中のプロジェクトに関する初期の知見を提示することにもなる。

Matthias ARNOLD マティアス・アーノルド

1967年生

ハイデルベルク大学ヨーロッパ中國電子資料センター

ChinaResource.org 研究員

主要著作 “‘Treasures for King Zhao Mo. The Tomb of the Nan Yue Kingdom’. A case study on the implementation of multimedia-elements in art-historical projects” “Datenbanken: Typen, Funktionalität und Perspektive der Nutzbarmachung” “Modern China Databases, Premodern China Databases” ほか多数

Historical Inscriptions at Cloud Dwelling Monastery: Preparations for a CD-ROM

Matthias Arnold
(Universität Heidelberg, Germany)

In more than five centuries the Cloud Dwelling Monastery (Yunjusi 雲居寺) at Fangshan 房山 produced about fifteen thousand stelae on which texts from the Buddhist canon were engraved. To commemorate special events a number of historical inscriptions were written. Twenty-eight of these, dating from 616 to 1999, have been analyzed, transcribed, and translated.

To provide easier access to the material, the texts shall be presented on a CD-ROM. This will pose a number of problems for both conception and design. Three of the most important are:

First, the texts have to appear in different forms, i.e. the user should be able to read the modern Chinese transcription parallel to the rubbing, and the annotated Chinese text parallel to the English translation. One will need to zoom into larger inscriptions or zoom out for a full view. Texts in the parallel windows optionally should be able to follow this movement or zoom.

Second, a lot of scholarship has already been done on these texts. As some of the stelae only exist in fragments or have suffered by erosion, different readings and interpretations exist. The CD-ROM therefore has to provide the means to indicate these variants.

Third, the inscriptions reveal a lot of information about the huge project of cutting the sutras into stone. Many names of persons, for instance, are mentioned in no other known source. The CD-ROM should therefore not only provide full-text search, but also special indices and background information.

My paper will introduce the user interface and discuss solutions for the three problems mentioned above. It will also present the current state of CD-ROM development and provide a first insight into this on-going project.

道教研究におけるデジタル資源

ファブリツィオ・プレガディオ
(スタンフォード大学、カリフォルニア)

佛教研究に比べ、道教研究のためのデジタル資料は現段階ではほとんど存在しないといってよい。利用できるものは二、三のウェブサイトによって提供されている限られた資料にすぎない。たとえば、これらに含まれているものに、(部分的に英語訳された) 中国の百科事典、『道教大辞典』の英語版やいくつかの電子テキストがあるが、その質や信頼性はまちまちである。このような状況はしかしながら、中央研究院の李豊楙教授の指導のもと、道藏全體をデジタル化するプロジェクトが二、三年の内に完了した際には、変化するはずである。

より小規模な進行中のプロジェクトとしては、私がしばらくの間攜わってきた、道教テキストについての書誌情報や画像情報を包含するデータベースがある(今回の会議でこれらのデータベースのサブセットをPDFファイルの形で配布する予定である)。このデータベースは限定的ではあるものの、文献資料に関する異なった性質のデータの収集とアクセスの容易さという点において、デジタル資料がもたらす潜在的可能性を示す一例である。このデータベースは、オンラインで利用可能な資料・概要・百科事典の項目などを簡単に収めることができるのである。

しかしながら、この領域における眞の進歩は、一次資料の信頼しうる電子版が利用可能となったときにはじめて達成される。道藏文献以外にも、内丹のような特定の伝統や、聖者傳のような特定の文学ジャンルを専門とする道教研究者にとって重要な資料は数多い。何人かの仲間たちとの準備的な議論に基づいて、私は道藏に収められていない主要道教文献の電子版製作の構想を提案する。佛教テキストのCBETAアーカイブは、有益なモデルを提供してくれるが、そのモデルにならってフォーマットされたひとつの「藏外」道教文献を提示したい。

私はさらに、電子テキストによって可能となる新たな多角的ツールの一例として、内丹に関する専門用語に焦点をあてた語彙データベースを紹介したい。このデータベースは、現在約2,500のレコードを持ち、それぞれのレコードは一次文献からの関連する文章の引用を含んでいる。このデータベースは個々の見出し項目を翻譯し、注釋を施し、それらを選択して辭書の形式で出力することを可能にするものである。

Fabrizio PREGADIO ファブリツィオ・プレガディオ

1957年生

スタンフォード大学宗教学部 Acting Associate Professor. Ph. D.
(ナポリ東洋大学)

主要著作 *Great Clarity: Daoism and Alchemy in Early Medieval China*
“The Notion of ‘Form’ and the Ways of Liberation in Daoism” *The Encyclopedia of Taoism* (editor) ほか多数

Digital Resources in Daoist Studies

Fabrizio Pregadio
(Stanford University, California)

Compared to Buddhist studies, digital materials for Daoist studies are, at present, almost inexistent. What is available consists of a few websites that offer limited resources. These include, for instance, a Chinese encyclopedia (partially translated into English), an electronic version of the *Daojiao dacidian* (Great Dictionary of Daoism), and several digital texts whose quality and reliability varies. This situation is bound to change within the next few years, when the project of digitizing the entire Daoist Canon, directed by Professor Li Fengmao at the Academia Sinica, will be concluded.

Smaller projects in progress include a database containing bibliographic and iconographic information on Daoist texts which I have been working on for some time (I will distribute a subset of these data as a PDF file at the Conference). Despite its limitations, this database is an example of the potential offered by digital materials in collecting and easily accessing data of different nature concerning textual sources. The database can easily accommodate materials available online, abstracts, encyclopedia entries, and so forth.

No real progress in this area, however, is possible until reliable digital versions of primary sources are available. Apart from the texts in the Daoist Canon, many other sources are significant for Daoist scholars who work on particular traditions, such as *Neidan* (Inner Alchemy), or on particular literary genres, such as hagiography. Based on preliminary discussions with some colleagues, I will present an initiative to produce digital versions of major Daoist texts not found in the Daoist Canon. The CBETA archive of Buddhist texts offers a valuable model. I will show an “extra-Canonical” Daoist text formatted according to that model.

As an example of the multiple new tools made possible by digital texts, I will also introduce a lexical database focused on the technical terminology of *Neidan*. The database includes at present about 2,500 records—each of which contains the citation of a relevant passage from a primary source—and offers the possibility of translating and annotating single entries, selecting them, and exporting them in dictionary form.



落成直後の人文科学研究所 本館



現在の人文科学研究所 分館

後記

「漢字と文化」の特集号として、「京都大学人文科学研究所創立75周年記念 中国宗教文献研究国際シンポジウム プログラムと発表要旨」を編集いたしました。これ一冊あれば、シンポジウムの全てがわかる、というコンセプトのもとに作成したものです。お役に立てば幸いです。

なお、英文、中文のアブストラクトを日本語に翻訳する作業にあたっては、人文科学研究所東方学研究部助手諸氏のお手をわずらわせました。快く協力して下さったみなさんにこの場を借りてお禮を申し上げます。

責任編集：稲葉稷、Silvio Vita、船山徹



京都大学本部構内へのアクセス

主要鉄道駅	利用交通機関等	乗車バス停	市バス系統	市バス経路	本学までの所要時間	下車バス停
JR / 近鉄 京都駅から	市バス	京都駅前	206系統	「東山通 北大路バスターミナル」行	約35分	京大正門前 又は 百万遍
			17系統	「河原町通 錦林車庫」行	約35分	百万遍
阪急 河原町駅から	市バス	四条河原町	201系統	「祇園 百万遍」行	約25分	京大正門前 又は 百万遍
			31系統	「熊野・岩倉」行	約25分	京大正門前 又は 百万遍
			17系統	「河原町通 錦林車庫」行	約25分	百万遍
			3系統	「百万遍 北白川仕伏町」行	約25分	百万遍
地下鉄烏丸線 烏丸今出川駅から	市バス	烏丸今出川	203系統	「銀閣寺道・錦林車庫」行	約15分	百万遍
			201系統	「百万遍・祇園」行	約15分	百万遍 又は 京大正門前
地下鉄 東西線 東山駅から	市バス	東山三条	206系統	「高野 千本北大路」行	約20分	京大正門前 又は 百万遍
			201系統	「百万遍 千本今出川」行	約20分	京大正門前 又は 百万遍
			31系統	「修学院・岩倉」行	約20分	京大正門前 又は 百万遍
京阪 出町柳から	徒歩	(東へ)			約20分	
	市バス	出町柳駅前	201系統	「祇園 みぶ」行	約10分	百万遍 又は 京大正門前
			17系統	「錦林車庫」行	約10分	百万遍

Chinese Characters
and Culture



発行日 2004年11月15日

発行者 文部科学省21世紀 COE プログラム

「東アジアにおける人文情報学研究教育據點—漢字文化の全き継承と發展のために—」

住 所 〒606-8265 京都市左京區北白川東小倉町47 京都大學人文科學研究所

電 話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

e-mail coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

竊以宮儀方載之廣渙識懷靈之異談夫以無於具極